

*The Fulbrighter*  
*in*  
*Chubu*

NO. 1 5

March 2005

CHUBU GARIOA/Fulbright Alumni Association

## 巻頭言

### フルブライト・メモリアル基金による交流の成果を期待して

上田 慶一（中部同窓会監事）

本年度（2004年度）も、およそ400人の教育者が米国から来日した。これは1997年度から実施されているフルブライト・メモリアル基金（FMF）の教育プログラムによるものである。

本年度は、6月と11月の2回に分かれて、それぞれ200人の教員および教育関係者が来日した。約3週間の日本滞在中、まず、東京でのオリエンテーションならびに都内での研修ののち、日本各地に分散し、20人ずつを一団とした10グループがそれぞれの地域でおよそ一週間、学校現場での研修、視察およびホームステイ等がなされた。

日米教育委員会によると、現在までの参加者数は4,600人にのぼるといふ。中部地区にも、毎年2グループが来訪し、中部同窓会から日米教育委員会の代表世話人として一人が出席し、彼らを出迎え、彼らの受入を引き受けていただいた自治体首長（市長等）にご挨拶を申し上げている。

滞在中の日程、内容等は自治体によって多少の差はあるものの、主なものは、大学を含めた学校、教育施設等の見学、教職員やPTA等との懇談がメインとなる。特に、懇談会での質疑応答には両国の制度や教育に対する考え方等が異なることが多く、興味深い討論となることが多い。印象に残ったのは、教育内容の裁量の自由度や評価の問題、教員の待遇等であり、それぞれの議題にさかれる時間不足で終わりとなることが多い。

私は、これまで彼らの8グループ、およそ160人の教員達を中部同窓会側の世話人として出迎え、僅かな時間ではあるが、彼らと懇談し、彼らの意見等を聞くことが出来た。彼らの訪問地域は愛知、岐阜、三重であったが、それぞれの地域での心温まる受入に感謝していた。

情報化社会の中にある今日でも、実際に自分の眼で見聞することが心の中に印象深いものとして残るもので、この様な体験を通して、より人間的

な「きずな」が深まるものである。私も米国各地の教員の話聞くにつけ、現在の米国の若い世代の人たちの考え方や行動のありようを知ることになった。

例えば、NYCのブロンクスの高校教師は授業中に9/11のテロが発生し、窓の向こうに見える煙に動揺したものの、すぐ窓のカーテンを閉め切り、生徒に不安を抱かせない配慮をしつつ、授業を継続したという。その後、貿易センターで親を失った生徒への細やかな配慮等も熱心に話した。このような今日的な生々しい話が聞かれると同時に、私たちに対して意見を求めてくることも多い。

ステレオタイプ的な米国感から脱して、今の米国人の考え方、ものの見方が大きな転換期に来ている現状を、彼らから知ることが少しでも出来たことは貴重なことであつたと思う。私は、このFMFによる人物交流が将来の日米相互の理解に大きな弾みとなり、それが教育を通してそれぞれの地域社会でのより良い相互理解となつて広がることを期待している。

数年前、所要のため渡米した際にFMFプログラムに参加して中部地区に滞在した一人と再会した。彼は高校教師としてTexas州のある都市にいるが、彼の案内で学校訪問や教職員との懇談会に参加させていただいた。彼によれば、訪日前と後では、日本に対する見方、考え方がより具体的に変化したという。やはり、日本人にとって近い米国でも、米国人にとっては遠い国、日本という意識が底流にあつたのではないか。それが、滞日経験や人との出会いを通して相互間の心理的距離を近づけたのではないかと考える。

人的交流を通して相互理解の大切さを説かれた故フルブライト氏の意志を生かすためにも、このプログラムが今後とも、日米両国の大きな掛け橋の一つとなり、実り多い成果をもたらすことを期待するものである。

## The Fulbrighter in Chubu no.15

### 目 次

#### 巻頭言

フルブライト・メモリアル基金による交流の成果を期待して 上田慶一 .....1

#### 総会ゲスト・スピーチ

「ブラウン」判決50周年、公民権法40周年によせて 川島正樹 .....4

#### 例会ゲスト・スピーチ

「東海地震」を考える 山田功夫 ....19

#### 随想

50年を過ぎて 市川芳彦 ....40

留学時代の思い出—教員組織の日米差実感と変遷 江口昇次 ....44

大学キャンパスの風に吹かれて 梅沢時子 ....48

貴重な体験 堀部憲夫 ....51

便り・たより .....53

会員移動 .....54

会議報告 .....55

平成15年度会計報告 .....59

平成16年度予算 .....60

年会費納入状況について .....61

GF事務局より .....62

## 「ブラウン」判決 50 周年、公民権法 40 周年によせて

### —— 5 年間の市民権運動の活動家や研究者を訪ねる

#### 旅から——

川島正樹

南山大学アメリカ研究センター長、  
(1994—95 年度)

(註：講演はスライドショーを交えつつ行われました)

今年アメリカの公立学校の「人種隔離」を違憲とした最高裁による「ブラウン」判決の 50 周年です。南山大学アメリカ研究センターとして今年は何らかの記念行事をしようということで、実は「ブラウン」判決が下された丁度 50 年後の 5 月 17 日当日に、在名古屋アメリカ領事館主席領事ゲイリー・大庭氏をお招きし、主に南山大学の 1 年生を対象としてお話をいただきました。私のお話は南山大学アメリカ研究センターの「ブラウン」判決にちなんだ催しシリーズの第二弾ということにもなります。

日本の裁判もそうかもしれませんが、実はアメリカの裁判はただ一度の判決だけで終るものではありません。原告の失われた権利や利益を回復するための手段を講じるために、様々な手立てが講じられるところまで含めて、裁判所は関わりを持ちます。50 周年の日の『ニューヨークタイムズ』によれば、「ブラウン」判決は 50 年前のたった一度の判決文の発表で終わったわけではありませんでした。被告側のカンザス州トピカ市教育委員会が、最高裁から監督権を委任された連邦地方裁判所の監視を離れるのに、実に 45 年の歳月を必要としました。記事の見出しは「ブラウンの 50 年後、問題はしばしばお金」とされています。現在の問題は市内各校の生徒の「人種」割合の均衡化というよりも質の高い教育を実現するための財源確保である、と同紙は伝えています。

次にお見せするのは 2002 年夏に私がスタンフォード大学の「マーティン・ルーサー・キング・ジュニア文書史料編纂プロジェクト」を訪れた時のものです。同プロジェクトを指揮するクレイボーン・カーソン教授から言わば内緒でいくつかの編集作業中の史料コピーを特別に許していただきました。一時話題となったキング牧師の博士論文の「剽窃事件」はアシスタントの学部学生や院生が発見した事実だったそうです。編集作業が終了するまでにはあと何十年もかかるだろうとカーソン教授はおっしゃっていました。作業は意外と小さなサイプレスホールという建物内で進められています。

次はいよいよアーカンソー州リトルロックです。2002 年の 8 月に訪ねました。1957 年 9 月にセントラル高校では白人の親たちが 2000 名以上の生徒のうちにたった 9 名の黒人生徒を入学させる「人種共学」命令に反発して大変な騒ぎを起こし、アイゼンハワー大統領の命令で 1000 名の連邦軍最精鋭部隊で、今回もイラクに派遣されている第 101 空挺団が出動する騒ぎとなったことで有名です。もちろん連邦軍部隊は落下傘で降下してきたわけではなく、夜陰に乗じてトラックで派遣されましたが、連邦軍兵士が同国民に銃剣をつきつけて対峙して治安の回復に当たるという、大変にショッキングな光景が繰り返されました。あまり知られていませんが、実は翌 58 年 9 月、フォーバス州知事は州法によって「人種統合」した学校の閉鎖を可能とし、間もなくセントラル高校をはじめ市内の高校が閉鎖されました。この措置は少なからぬ数の白人の親たち、とりわけ母親を含む良心的白人市民の行動を喚起し、「女性緊急委員会」が設立され、大々的な「学校再開」運動が展開されました。私はこの「女性緊急委員会」のかつてのメンバーにもインタビューすることができました。南山大学英米学科同窓生、現在アーカンソー大学リトルロック校で社会学教授を務める伊藤琴子氏の計らいにより、当時州知事公舎詰の地元有力紙『アーカンソーガゼット』の「番記者」を勤めたジェリー・ドナウ氏に当時の模様を伺い、事件の真の責任者は誰かなどといった私の質問への答をお聞きしました。ドナウ氏はフォーバス知事を第一に挙げましたが、第二に彼が責任者としてあげた人物はアーカンソー州選出のフルブライト上院議員でした。フルブライト氏は 57 年 9 月の混乱の重要な期間をロンドンで過ごしたそうです。もしフルブライト

ト氏が国際問題と同様に勇気をもって国内の問題に取り組んでいれば、あのような混乱にはならなかったかもしれない、というのがドナウ氏の思いでした。

かつての「リトルロックの9人」のうち、現在同市内に居住しているのは、白人暴徒にとり囲まれて危うく難を逃れたエリザベス・エックフォード氏と、罵声を浴びせた白人男子学生に食堂でチリソースをかけるなどで退学処分となったミニージーン・ブラウン氏の2名のみでした。エックフォード氏は現在郡裁判所の保護監察官です。私が当時の話を聞いている最中に突然彼女は大声で泣き始め、45年の歳月を経てもなお当時の心の傷が癒えないことを思い知らせてくれました。ミニージーン・ブラウン氏には退学後の生活について聞いてみました。幸いにも彼女の母親が知り合いでもあった「ブラウン」裁判で原告側の有力な証人となったニューヨーク市立大学の心理学者ケネス・クラーク教授の個人的支援を得てニューヨークで高校を卒業し、オハイオで大学を卒業後、徴兵拒否を決意した夫とともにカナダへ亡命し、その後クリントン政権二期目に労働次官補として迎えられて帰国したそうです。私はセントラル高校博物館で偶然彼女の娘さんに出会い、インタビューの機会を得ることができました。



白人住民は どうしてあれほど暴力的に、たった 2000 分の 9 に過ぎない黒人生徒の入学に暴力的に反発したのでしょうか。その答の鍵を語ってくれたのが、当時中学生だったロン・ヒューズ氏でした。黒人住民は市内東側の「黒人居住区」から次第に西側に進出し始め、当時彼の自宅は「黒人居住区」と「白人居住区」の境界線上にありました。セントラル高校から目と鼻の先の場所です。なぜ白人住民は黒人の転入を嫌ったのでしょうか。それは「偏見」というよりも、経済的理由でした。黒人の転入した地区の不動産評価額は低落するのが常だったからです。結局彼の家は買値をはるかに下回る価格で売却され、西部地区へ引っ越し、より高い値段で狭い住居に転居し、父親は多額のローンを負うことになったそうです。北部でも問題となっていた「街区破壊商法」が南部でも横行するようになっていたのです。

事実を申しますと、連邦軍の出動を含む一連の「セントラル高校危機」事件やその後の黒人や良心的な白人の運動よりも、結局は 1964 年の強力な連邦法である公民権法の施行によって、劇的な変化がもたらされます。それまで従来の白人専用学校に通う黒人の数は 10 人にも満たなかったのですが、64-65 年度に 213 人、66-67 年度には 1,511 名に急増します。「上から」ドンと下される連邦最高裁の判決命令よりも、「下から」の広範な運動の圧力を受けて民主的に連邦議会で決められた、罰則規定も盛り込まれた強力な連邦法の成立とその実行によって、劇的な変化が生じることになりました。

実は「セントラル高校」の「統合」によって、いわば「犠牲」を強いられたのは白人だけではありませんでした。名門黒人高校であるダンバー高校はダンバー短期大学ともども廃止され、中学校に格下げされて編成替えされました。かつての名門黒人校、ダンバー高校の名を現在にまで伝える、現ダンバー・マグネット中等学校と、内部に保存される「同窓会室」を、私は訪ねることができました。黒人同窓生の気概は私が訪れた閉校から半世紀後の今も伝わってきます。

その他、「女性緊急会議」の指導者でかつての大プランターの邸宅、現在は装飾博物館となっているアドルフィン・テリーの旧宅も訪れました。「女性緊急会議」の 1000 名ほどの会員名簿が公表されたのは事件の実に 40 周年の 1997 年でした。これほどまでに公表が遅れたのは白人住民

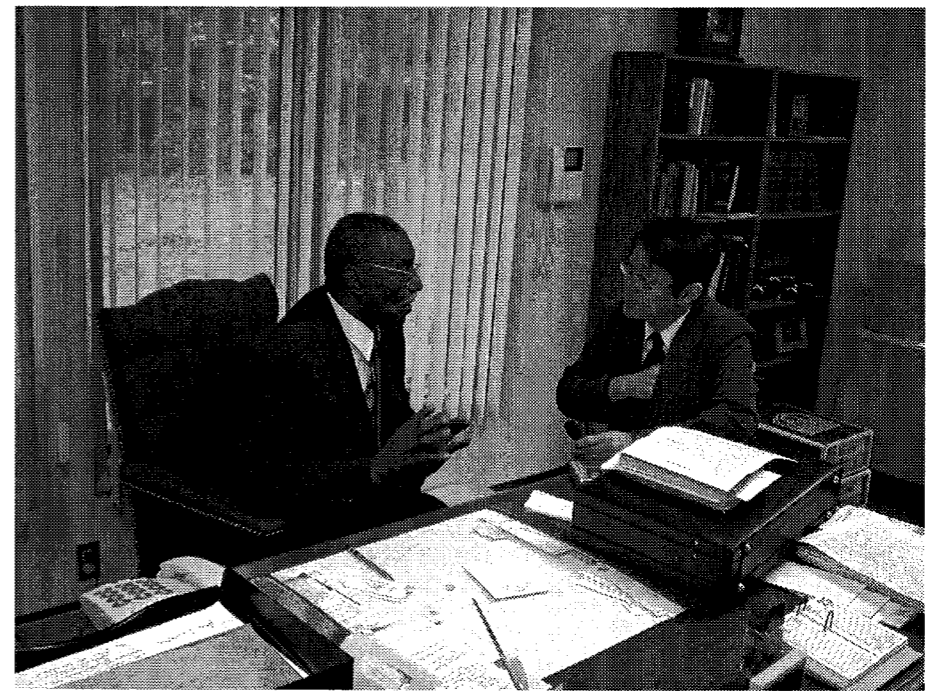
からの報復を恐れたからでした。白人内部での「裏切り」への報復の強さが理解できます。セントラル高校に入って正面玄関の右脇には、途中で退学となったミニージーンを含め「リトルロックの9人」が顕彰されています。道路をはさんで向いにあるガソリンスタンドは現在内務省国立公園局管轄のセントラル高校に関する博物館となっております。現在のセントラル高校長ナンシー・ルソー氏は日本の学校を視察した経験もある方です。

(CDプレーヤーで“I wake up this morning with my mind stayed on freedom”を流しながら) 1961年秋から翌62年夏にかけて、カーター元大統領の故郷に近いジョージア州南西部のピーナッツ畑に囲まれた小都市オールバニーで連日街頭デモによる闘争が高揚しました。アトランタから車で飛ばして2時間半から3時間ほどのところにある町です。合計1,100名を超える逮捕者を出しながら、キング牧師最初の地域闘争は失敗したとされます。キング牧師に関する概説書などでは次の闘争の地に移りますが、地元の民衆にとっては運動が終ることはなく、現在まで続いています。民衆が報復への恐怖を乗り越えるための歌唱を指導したかつての「スニック・フリーダム・シンガーズ」は現在3ないし4代目で、地元高校生が一翼を担っています。かつてのデモ隊の「出撃基地」の一つで現在は博物館となっている旧マウント・ザイオン・バプティスト教会で月一回開催されるパフォーマンスは、当時の運動が歌唱とともに再現されています。最後のシメは、手に手を取っての“We Shall Overcome”の合唱です。私も当時の気分を実感することができました。

インタビューに応じてくれた方々を紹介しますと、まずC・B・キング・ジュニア氏は親子二代にわたってジョージアの片田舎で貴重な黒人弁護士です。次に61年にオールバニーを訪れて以来当地で活動を続け、70年代後半には市行政委員にも当選した、もとSNCC(スニック)活動家チャールズ・シェロッド氏。そして今でも続く学校の「人種統合」裁判の被告側である郡教育委員会の弁護士ウィリアム・アーウィン氏ですが、今や被告の郡教育長も黒人です。5回も逮捕されてなお怯まなかった不屈の闘士ウィリーメイ・トマス氏は、旧マウント・ザイオン・バプティスト教会の隣に暮らしています。マウント・ザイオン教会と並んでデモ隊の「出撃基地」だったシロー・バプティスト教会のH・C・ボ

イド牧師です。そして当時中学校教師をしていたために直接デモ隊に関われなかったものの、退職後の最近オールバニー闘争の郷土史的研究をまとめたメアリー・ロバート・ジェンキンズ氏からは色々と貴重な情報を得ました。

次は一連の市民権地域闘争で最も有名なアラバマ州バーミングハム闘争です。キング牧師が指導者として活躍し、1963年春にアラバマ州バーミングハムで高揚した地域闘争ですが、1956年から7年間にわたるフレッド・シャトルズワース牧師と彼が率いる「アラバマ州キリスト教人権運動」の活躍なくしては、勝利はありえなかったのです。闘争終結後間もなくシャトルズワース牧師はオハイオ州シンシナティへ転任しました。私は2002年8月、現在はオハイオ州シンシナティに所在するグレート・ニューライト・バプティスト教会の牧師を務めるシャトルズワース師を訪ねました。82歳の現在でもかくしゃくとして壇上を縦横無尽に動きながら熱弁をふるう姿に、60年代の雰囲気がよみがえりました。それを日曜のミサに参加して実感しました。



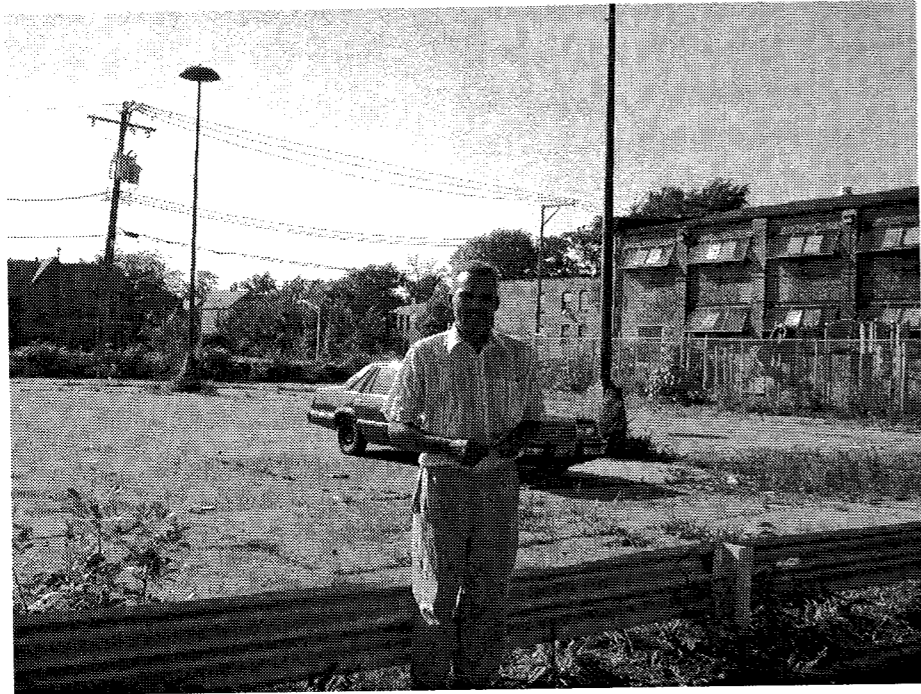
現在私はバーミングハム闘争に関する論文を執筆中ですが、実は2種類の「合意」文が存在する事実を発見しました。ケネディ政権は合意の中身よりも、地域的努力の果てに合意が成立したという事実を重視したのです。それゆえ、成立の翌日夜のKKKによる連続爆破事件に関連して起こった「暴動」事件にも、「合意体制」を保護するという名目で連邦軍の投入を命じたのです。南北戦争後初の、裁判所命令に基づかない、純粋な治安維持のためのアメリカ連邦軍部隊の出動となりました。そして間もなく、若き理想主義的大統領は包括的な公民権法の議会への上程を決意するに至るのです。それは彼の命と引き換えに翌1964年7月に成立するに至ります。63年5月2日以降に闘争に劇的変化をもたらす学童生徒のデモ隊の出撃基地となった第16番通りバプティスト教会の真向かいにあるケリー・イングラム公園には、警察犬をけしかけられ、高圧放水を浴びせられ、次々に1000名以上が逮捕され、退学処分を受けた学童生徒の像が建てられています。なお、退学処分は発令後間もなく、法的措置によって停止されました。

インターステート・ハイウェイ20号線上をアトランタからバーミングハムへ西に向かってアラバマ州に入ったすぐのところにあるインフォメーション・センター脇に立つ石碑の文“Alabama: We Dare Defend Our Rights”（「アラバマ、敢えて我われは自らの権利を守る」）には、やや不快な感情を抱かされました。「人種」差別の根拠とされた「州権論」の主張のように思われたからです。ただし今では「We」の範囲にはすべての人が含まれるのであろうと願う次第です。バーミングハム公民権研究所内でオデッサ・ウールフォーク名誉館長とバーミングハム闘争の当時、弁護士を務め、白人側の妥協に尽力したデイヴィッド・ヴァン氏ともお話ししました。ヴァン氏はかつて1954年5月17日に最高裁判事ヒューゴ・ブラックの法律事務官として「ブラウン」判決が下される最高裁法廷の現場にいたそうです。後に70年代に白人としては最後のバーミングハム市長に就任されます。私とのインタビューの翌年の2000年に病没されました。この時には病をおして暑い中、私とのインタビューに応じてくれました。バーミングハム公民権研究所に隣接する、当時のデモ隊の出撃基地で63年9月15日の爆破事件で4名の少女が亡くなった事件が起こった第16番通りバプティスト教会の生存中の容疑者2名

は、2001年と2002年に再審裁判とともに終身刑の有罪判決が下されました。

バーミングハム闘争の勝利後間もない1963年8月28日、首都ワシントンで25万人以上が集まって「ワシントン行進」が行われました。議会上程中の公民権法成立を訴えた、あのキング牧師の「私には夢がある」演説から40年の歳月がたった去年の『ニューヨークタイムズ』記事では、時代の隔たりをいささか感じざるを得ないという感想が多く述べられていました。

次にシカゴです。1964年に公民権法が、翌65年に投票権法が成立して、南北戦争から丁度100年後に「法の下での平等」を達成した市民権運動ですが、北部の法によらない、事実としての差別隔離体制（*de facto segregation*）に挑むべく、キング牧師は1966年をシカゴでの運動に費やす決意をしてウェストサイドのゲットー地区のアパートに移り住んだのでした。私がシカゴにおけるキング牧師の足跡を最初に訪ねたのは、2001年8月末から9月初頭でした。その折に、キング牧師のかつてのアパートのあった場所の近く、「犯罪多発地区」として知られるウェストサイドのノースローンデイル居住区を訪ねました。この地区を代表するかつての「シカゴ自由運動」の活動家で、その後もさまざまな地域活動に従事するリチャード・バーネット氏のお話を伺うことができました。お見せしているのは自宅の美しい庭に立つ、かつての「シカゴ自由運動」活動家リチャード・バーネット氏です。彼の自宅周辺は彼の努力によって、非常に安定したコミュニティを保っています。ただし地元黒人新聞の記者でもめったに訪れない地区だそうであります。インタビュー後、バーネット氏は私に「キング博士の住んでいたアパートのあった場所に行ってみますか」と誘って下さいました。写真にあるバーネット氏の立つ後ろの空き地には、かつてキング牧師が住んだアパートがありました。キング牧師は黒人地区でもより貧しい人が暮らすウェストサイドに居を構えたのでした。今は何の跡形もなく、何の顕彰もなされていません。ただ剥き出しのコンクリートの表面だけが遠く過ぎた時間の隔たりを感じさせるだけです。



黒人の南部から北部への大量移動は2波に分かれました。第一波は第一次世界大戦前後で、戦争のために流入が途絶えたヨーロッパからの移民労働力に代わって180万人ほどの大量の南部黒人が、シカゴなど北部工業都市へ移動しました。第二波は綿摘み機械の導入や除草剤の使用など南部農業の近代化に伴って、第二次世界大戦後に起こりました。500万人の黒人が南部を後にしたのです。この時にシカゴではウェストサイドが彼ら／彼女らの受け入れ先となりました。旧来の黒人たちはサウスサイドの南部へ移動しました。旧来の黒人でも富裕な人びとは、ゲットー住民とかけ離れた美しい町並みに暮らしております。

ウェストサイドに話を戻せば、かつて同地区の運動を担ったダニー・デイヴィス氏は今や連邦下院議員として活躍しています。黒人のみならず、中国系、ラティーノス／ナティーナ系の住民の陳情を受けるので忙しい中を、私とのインタビューに時間を割いてくれました。氏の政治事務所近所にある住宅の風景ですが、今やゲットーの一部では住宅改良が進行しているのが分かります。

キング牧師の「シカゴ自由運動」はゲットーの改善事業と並んで、郊外地区への都心部黒人民衆の転住促進運動も刺激しました。76年の最高裁判決を受けて78年から98年までの20年間に約7000名の都心部ゲットー住民の郊外地区への転住を実現した大都市圏地域開放指導者会議の本部を訪れ、お話をお聞きしました。

実は旧来の黒人指導層はキング牧師の来訪を嫌ったのでした。彼の方が人気があるので、自分たちの指導性が脅かされると懸念したのです。サウスサイドに立つ荘厳な黒人教会の今では「キング・ドライブ」という名がつけられた通りに面したドアは、今でも当時の「嫌がらせ」の名残として、板が打ち付けられたままで、閉鎖されています。

キング牧師が残したもう一つの遺産である、ジェシー・ジャクソン師率いるPUSH・虹の連合本部で女性の副議長のウィリーメイ・バロー師にお話を聞ききました。今でも雇用の実現を求めて商店にピケを張るということでした。戦前からの労組運動家ティムエール・ブラック氏をサウスサイドのご自宅に訪ねました。有名な労働運動家フィリップ・ランドルフの写真を指差していました。若手の政治家として注目される、ハワイ生まれ、ハーヴァードのロースクールを2番の成績で卒業した弁護士で州上院議員のバラク・オバマ氏にもいろいろと質問する機会を得ました。「一番扱いが難しいのは柔軟性を欠きがちな旧来のブラックパワー活動家である」という指摘が印象的でした。オバマ氏は2004年秋の連邦上院選に出馬予定で、将来の大統領候補とも噂されている実力者です。このような人びとは私が翻訳に関わったハーヴァードのウィリアム・ジュリアス・ウィルソン教授のご紹介で接触することができました。

最後に、60年代に州レベルで闘争が高揚したミシシッピ運動の足跡と現在を訪ねた旅についてお話します。私は2000年と2001年に2度訪れました。お見せしている写真は史料収集でお世話になった、南北戦争後に立てられた黒人大学トゥガルー大学(Tougaloo College)の正門、ミシシッピ州公文書館(ともにジャクソンに所在)、そして南ミシシッピ大学(ハティスバーグに所在)のオーラル・ヒストリー研究センターです。南ミシシッピ大学オーラル・ヒストリー・プロジェクト責任者はチャック・ボルトン教授で、私は彼の助言を受けてかつての活動家をはじめ様々な人びとに会うことができました。



次の写真は、分裂したままのミシシッピ民主党を統合するのに尽力し、80年代に初の「リベラル派」州知事となったウィリアム・ウィンター氏です。日本から電話番号を調べてジャクソンに所在する氏の法律事務所で会うアポイントメントを確保しました。電話番号の確保に関して同僚のウォーデル先生から頂いたアドバイスに感謝します。何よりも印象的だったのは、私が発した「ミシシッピ運動は外部の先導者による運動だったと思われませんか」という質問に対する、ウィンター元知事の「ミシシッピ運動は主要には自生的な運動であった」という答えでした。

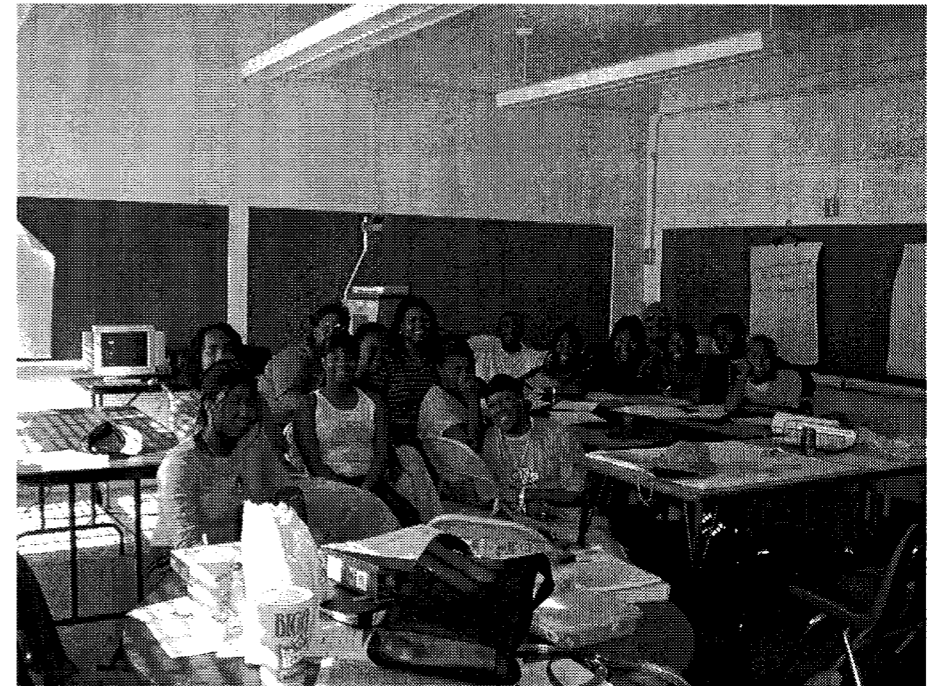
州レベルでは1968年秋までに消滅したミシシッピ・フリーダム民主党でしたが、黒人が人口的に圧倒するホームズ郡にはまだ郡としての組織が健在です。折からの写真展を見せてもらいました。議長は30年以上ウォルトン・ブルース氏が務めていました。

かつてのCOFO-SNCCの地元出身活動家は、今や州内、そして州外各地に散っていますが、皆それぞれの持ち場で活動を続けています。私はジャクソン市内では数少ない地元出身白人活動家エド・キング氏からお話を聞き、中央部丘陵地帯のアッタラ郡にマッカーサー・コットン氏を訪ね、そして遠くはワシントンDCでローレンス・ギヨット氏やヴァージニア州ピーターズバーグにまで足を伸ばしてヴィクトリア・グレイ・アダムズから直接お話をうかがい、当時の息吹を体感することができました。

まとめとして南部の諸都市の「北部化」するについて述べます。ミシシッピ州南部の農村地帯の中心都市ハティスバーグでも、中心部には黒人、郊外郡部には白人というように、「人種」的住み分けが進行しています。ジョージア州の片田舎の小都市オールバニーの所在するドーティー郡でも同様に、中心都市には黒人、周辺郡部の新興コミュニティには白人という北部の都市部と同じ「人種」の住み分けが進行しています。バーミングハムでも「北部化」が起っていますが、1990年代に白人の都心部回帰現象も見られるようになってもいます。やはり大都市の機能性とエンターテインメントの魅力は捨てがたいのでしょうか。そして都市の再生は共通のテーマとなりつつあります。

かつてのCOFO-SNCC指導者ボブ・モーゼズ氏の現在の様子を訪ねてみました。モーゼズ氏は66年から10年間、徴兵を拒否して、最初は

カナダ、その後間もなく東アフリカのタンザニアに亡命した後に、特赦を受けて帰国しました。モーゼズ氏は今でもNPOを主宰して活動しています。ただしかつて投票権の獲得に奔走した彼が今集中するのは、何と代数教育です。200万ドル以上の資金援助を確保して、高校生たちに自力で大学教育への道を切り開かせようとしているのです。手段は違っても、彼が目指すのは個人の自立の模索です。ミシシッピ州都ジャクソンの黒人ゲットー地区のレイニア高校は正面玄関に金属探知機が設置され、男女の警官が常駐していたのが印象深いことでした。なぜかつて生命の危険にもかかわらずCOFO-SNCCの活動家たちがモーゼズ氏とともに民衆の組織化に奔走したのか、ゲットー地区の高校生たちが一生懸命モーゼズ氏と代数や幾何の問題を解く様を見ながら、私には分かるような気がしました。彼がキング牧師の運動で否定したカリスマ性が、実は彼にも備わっていたのでした。やはり社会運動は「人」が動かす側面が否定できない、というのが私の結論の一つです。



COFO-SNCC活動家として60年代前半に活躍したホリス・ワトキンス氏は、しばらく運動から遠ざかっていましたが、やがてコミュニティ

自立化運動のNPO「サザン・エコー(南部のこだま)」を設立しました。かつての同土ボブ・モーゼズ氏とも協力して、運動のネットワークが再生しています。

ブラウン判決と公民権法はどこまでアメリカを変え、各地で起こった公民権運動はどこまで地域社会を変えたのだでしょうか。結局は南部を北部化しただけなのではないでしょうか。つまり非合法的な差別からより適法的な差別に、そして格差の放置を「自己責任」で正当化しようには変わったということです。そして民主党と共和党の二大政党は、かつては理念を異にする人びとが地域的に分かれて支持していましたが、今や地域にかかわらず理念で分けられるような大きな再編を経験しました。

運動の様々な成果は今やIT/サービス化とグローバル化がもたらす二極化の中で、大半の黒人民衆にとってほとんど無に帰しているようにさえ思われるかもしれません。2003年の黒人の貧困世帯率は24%で依然として白人の数値(8%)の3倍です。イラク戦争でアメリカの国益の保持を担った軍隊は1973年以降徴兵制が廃止され、日本の自衛隊のように志願兵部隊のみになっています。しかしその構成は社会構成を正確に反映しているとは言い難い、と昨年4月初頭に『ニューヨークタイムズ』紙国際版(2003年4月6日)は一面で報じました。同記事によれば、軍隊内の黒人兵士は民間人の「人種」構成比の2倍を占め、しかも高卒者が圧倒的に多く、民間人の2倍以上でした。それに反して大学教育を受けた者は軍には少ないのです。要するに軍隊志願者の多くにとって、軍隊に入ることによって得られる奨学金が魅力の一つになっているのではないかと思います。国益の保護に最前線で命を賭す人びとには、貧しくても真面目で向上心のある黒人が目立つのです。

その一方で、先ほどのバーミングハムの例にも見られるように、かつての差別的な裁判の見直しは今でも続けられているのです。日本の冤罪事件と違って再審で裁かれる人びとはかつて白人のみの陪審裁判で無罪になった容疑者であり、再審で終身刑が決まる例が多いのです。ここに否定しようのない大きな変化が見て取れます。

最後に自慢話をお許しください。お見せしているのは『オールバニー・ヘラルド』(2001年8月9日付)です。私がジョージア南西部の小都市オールバニーでの滞在研究中に地元新聞の第一面で報じられたものです。



Kawashima Masaki, an associate professor of American history at Nanzan University in Nagoya, Japan, takes notes Tuesday from the display at the

Albany Civil Rights Museum in Albany as part of his research into the black movement for justice and equality in the United States.

## Scholar to introduce cultures

■ A Japanese professor says he grew up thinking of the United States as the land of equality, only to learn that he had been incorrect.

SISSY BOWEN  
STAFF WRITER

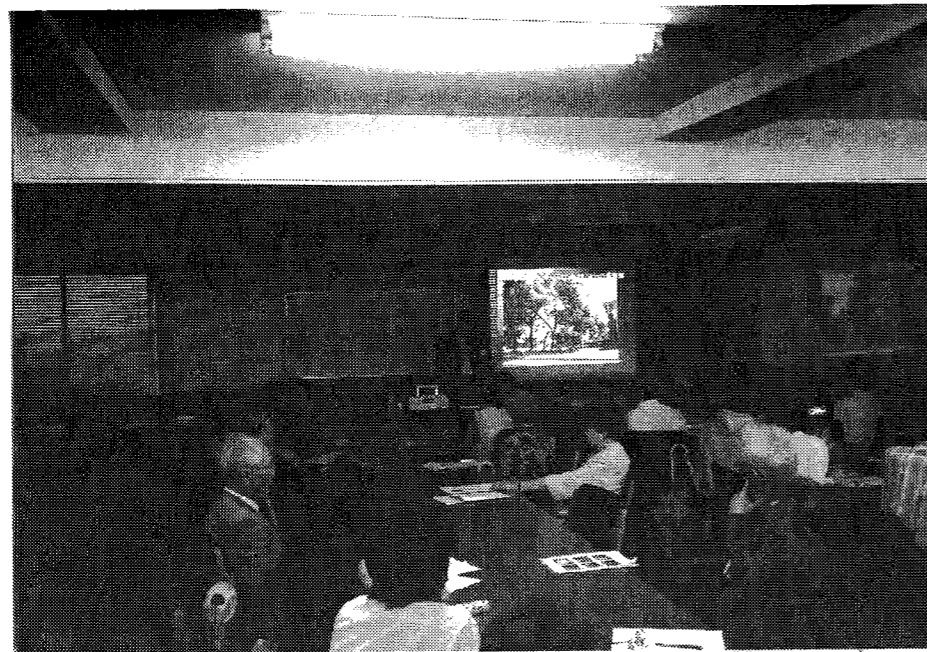
Masaki said Wednesday while conducting research at the Albany Civil Rights Movement Museum at Old Mt. Zion Church.

Masaki, now 46 and an associate professor of American history at Nanzan University in Nagoya, Japan, said his work will culminate in the first textbook

the civil rights of blacks in that country. The lecturer was a guerrilla leader and instructor of sociology at Botswana University in Botswana, South Africa, he said.

"I was deeply moved by his ability. He had the intelligence, as well as the physical power, to be a great leader."

ご清聴どうもありがとうございました。40分を超えてたつぷりと時間を使ってしまいました。(スライド写真一部省略)



## 「東海地震」を考える

名古屋大学大学院環境学研究科  
附属地震火山・防災研究センター教授  
山田 功夫

今日は、「東海地震を考える」というテーマをいただいたのですが、東海地震のことを考えていたら、地震が新潟で起こってしまったので、その話もしなくてはと思っております。この付近では東海地震が起こる、起こると言っているのですが、そればかりを言っていると、新潟のようなもっと怖い地震が起こるのではないかなと思っているので、そういう話を紹介したいと思います。

### マグニチュードと震度

最初に、ちょっとだけ地震の知識を復習しておきたいと思います。地震で使う言葉にマグニチュードという言葉がありますが、地震学者がサボっていて日本語に訳さなかったので、なかなか分かってもらえない部分があります。これは、震源での地震のエネルギーの大きさを表す量で、(対数で実際に表していますので)、マイナスのずっと小さい方から9まであります。それで、マグニチュードが1違うと、エネルギーでは30倍違うので、マグニチュードはとんでもなく刻みの荒いものさしです。

それから、もう1つ、震度というのがあるのですが、これは気象庁が発表する、その場所でどれだけゆれたか、という量なのです。ですから、マグニチュードが大きくても、遠くでは震度は小さくなるのですが、この2つが一般ではごちゃごちゃになってしまうことがあります。

もう1つまずいことには、震度というのは固有の日本のものさしで、外国にも震度にあたる言葉が存在します。日本の震度はむしろ尺貫法と同じで、日本特有なのです。同じ震度で同じような刻みを言うのですが、日本の気象庁震度は世界には通用しません。世界にはメートル法が別にあるのです。

要するに、マグニチュードの大きさを電球の光にたとえると、同じ電球であっても、近くでは明るい（震度が大きい）が、遠くでは暗くなる（震度は小さい）ということです。

### 地震の種類

まず、非常に大きな地震があると災害が発生するわけですが、大きな災害を起こす地震には2つのタイプがある。1つは、海溝型の地震。これはあとで説明しますが、プレートの沈み込みに伴う地震です。この地震の例としては、たとえば日本海溝の三陸沖地震。それから、南海トラフ沿いに起こる、東南海とか南海地震、東海地震。ここは非常に大きな地震が起こる場所です。マグニチュードでいうと、8以上の地震が起こるところです。海溝で巨大な地震が起こると、津波が起こります。それから、非常に大きな地震なので被害が広がります。幸いなことに、日本の場合はプレートの沈み込みの場所＝地震が起こる場所は陸から大体100km位先のところにあり、地震が起こる場所と人が住んでいるところが少し離れています。だから、被害が大分軽減されます。こういうのが、海溝型の地震です。

もう1つは、内陸型・直下型の地震です。この地震は活断層が動くことによって起こることはよくわかっているのですが、この活断層というのがあちこちにあり、それが困ったことです。都市に近いところで地震が起こります。たとえば被害を起こすような地震は震源の深さも浅く10kmくらいの深さのところでは起こるのですが、足元の地下10kmのところでは地震が起こるので、狭い範囲ですけれど、大きな被害が起こります。海溝型では、遠くで強い地震が起こるので、ゆっくりした振動でゆれます。内陸型は、足の下を叩かれるような格好で地震が来るので、両者の被害の様子はかなり違います。

さらに、地震には火山性地震というのがありますが、これが甚大な被害を及ぼすことはあまりないので、今日は除いておきます。

### 地震災害の規模と地震の発生頻度

日本付近で地震がどれくらいの被害を起こすかを見ていただきますと、100年間でマグニチュード7という、先日の新潟中越地震よりちょっと

大きい位の規模のものが大体100個ちょっとあるので、毎年1つくらい起きています。日本海溝付近で起こるマグニチュード8に近い地震は陸から100km位離れていて、被害を及ぼすことは余りない。ところが南海トラフ沿いの地震は沈み込み帯が陸に近いので、大きな被害をもたらすこととなります。

表一1 最近200年間に死者100人以上の被害を起こした地震

西暦	地震	マグニチュード	死者数
1828	三条	6.9	1443
1847	善光寺	7.4	12000
1854	東海道	8.4	1000
1854	南海道	8.4	3000
1855	江戸	6.9	7000
1891	濃尾	8.0	2773
1896	三陸	7.6	27122
1923	関東	7.9	142807
1927	北丹後	7.3	2925
1933	三陸	8.1	3064
1943	鳥取	7.2	1083
1944	東南海	7.9	1223
1945	三河	6.8	2306
1946	南海	8.0	1330
1948	福井	7.1	3769
1995	兵庫県南部	7.3	6433

表一1にありますように、死者が千人を越えた地震は過去200年間で17個起こっています。亡くなった人の数で被害の大きさをいうのがよいのかどうかはわかりませんが、こんなにたくさん起こっています。千人を超える地震は、過去200年間見ると、内陸の地震がほとんどです。三河地震、福井地震、兵庫県南部地震（阪神大震災）等々西日本に多く起こっています。この100年間では、千人を超える死者を出した大

地震は、10年に1個ある、という勘定になるのです。

さらに100年さかのぼってみると、やはりこの100年にも数個の地震が起こっています。死者が千人を超える地震が大体10年に1回位起こっているのです。ところが、我々の時代を考えてみると、福井地震の後、兵庫県南部地震までの50年間、死者千人を超える地震がたまたまなかった。そのため、我々は甚大な被害の地震をあまり経験してこなかったのです。私が学生の頃、“最近日本はラッキーだよな”、といわれていました。なぜかという、この間にもマグニチュードが7近い地震はちよくちよく起こっているけど、みな山間地で起こっており、甚大な災害に至っていませんでした。

けれども、少なくとも江戸の終わり頃からの200年間、ほとんど10年に1度の割合で死者が千人を超える地震が起こっています。1943年鳥取地震（マグニチュード7.2 死者1083）、1944年東南海地震（マグニチュード7.9 死者1223）、1945年三河地震（マグニチュード6.8 死者2306）、1946年南海地震（マグニチュード8.0 死者1330）、1948年福井地震（マグニチュード7.1 死者3769）と第2次世界大戦終わり頃には、ほとんど毎年起こっています。この中には、内陸の地震もあれば、海溝型の地震もあり、海溝型の地震はマグニチュード7.9~8.1位の巨大な地震です。たまたま、最近は大きな地震が少ないだけで、気をつけていないといけないと思います。

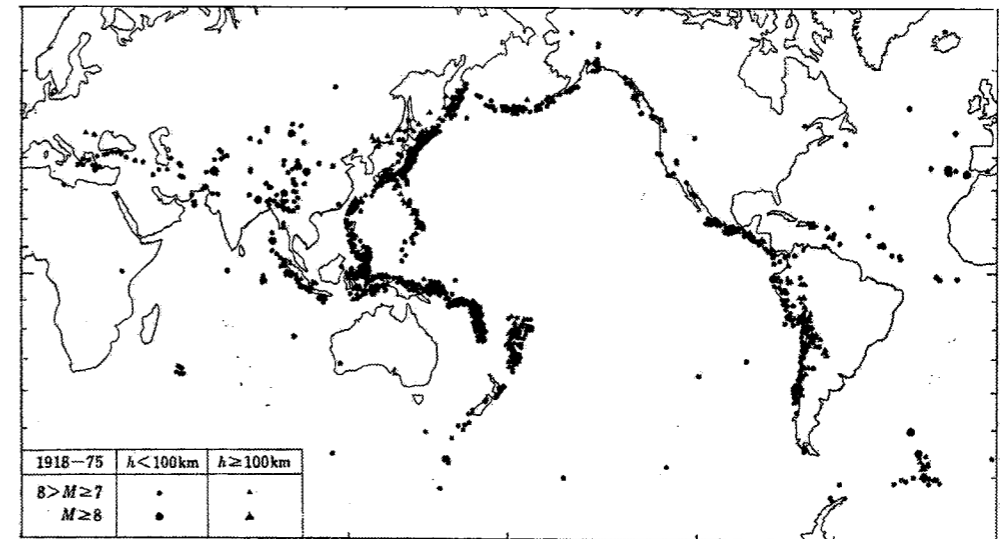
死者が千人を超えるというのは、実は火災による災害です。調べてみるとすぐわかるのですが、100人くらいまでの地震は沢山あるのですが、100人から一気に1000人くらいにまで死者の数は飛んでいます。つまり、ひとたび火災が起こると、甚大な被害になり人命が失われるというわけです。

#### 地震を起こす源

巨大な地震が起こるのは地球上で非常に限られた場所だけです。図一1に見られるように、太平洋周辺はマグニチュード7から8クラスの地震が起こる場所です。これ以外のところではほとんど起っていません。インドや中国で多少起ります。あとは、ぼつんと起こる場所もあります。

なぜ太平洋周辺に巨大地震が起こるかといいますと、地球科学でいう

図一1 1918-1975年に起こった世界の大地震  
(マグニチュード7以上)



とプレートという海底の岩盤が太平洋の東（アメリカ大陸より）で生まれ、アジア大陸に向かって進んできています。海底が動く量は1年間に7~8cm、ということが現在わかっています。

太平洋の海底が1年に8cmも西に動いていることなど信じられないような話ですが、証拠があります。太平洋に浮かぶハワイは1億年も前からあの場所（地球の中心を基準に）で噴火しています。活動中の山体は海底とともに1年8cm西に動いていくので、100万年もたつと80kmも移動するので下からのマグマの供給が絶たれ、これまでの火山は死んだ山になり、東に新しい火山が誕生します。こうしてハワイの西の海底には昔の火山が1列に並んでいます。その間隔は火山を作る岩の年齢から、海底が1年に10cm弱移動することに調和的です。

今は、すごいことが出来るようになりました。カーナビと同じで、人工衛星を観測しその位置を正確に決める方法があります。遠く離れた2箇所の間隔を測るには人工衛星の代わりに、電波を発している星の観測を使います。人工衛星からの電波を観測する代わりに遠い星からの電波を使うだけで、原理的には同じ方法です。今は、この方法でハワイと日

本の中の距離を直接測ることが出来ます。この観測で1年間に1cm縮むということが実際に分かるようになりました。今はアンテナを各地に置いて常時観測し、大陸間の移動を測ることができるようになりました。

われわれの日本（アジア側）は太平洋海底の岩盤が移動してきて、日本海溝のところで太平洋の海底はアジア大陸の下へもぐりこんでいき、600kmまでは潜り込んでいることが分かっています。このとき、相対的にはアジア大陸側が止まっていると考え、この潜り込むところで押し合いへし合いをしているということです。100年も経てば、海底の移動は10mにもなり、ここでの歪は大きなものになります。これが地震のエネルギーとなるのです。日本の付近だけを見てみると、太平洋の海底が潜り込む場所は千島列島から三陸沖、すなわち千島海溝や日本海溝、それから伊豆、マリアナでアジア大陸の下に向かってもぐっていきます。

もう1つ、南海トラフとっていますが、駿河湾から四国沖を通過して九州の東を南下するところにフィリピン海の海底が潜り込んでいます。ここが、東海地震や南海地震、東南海地震の起こる場所です。

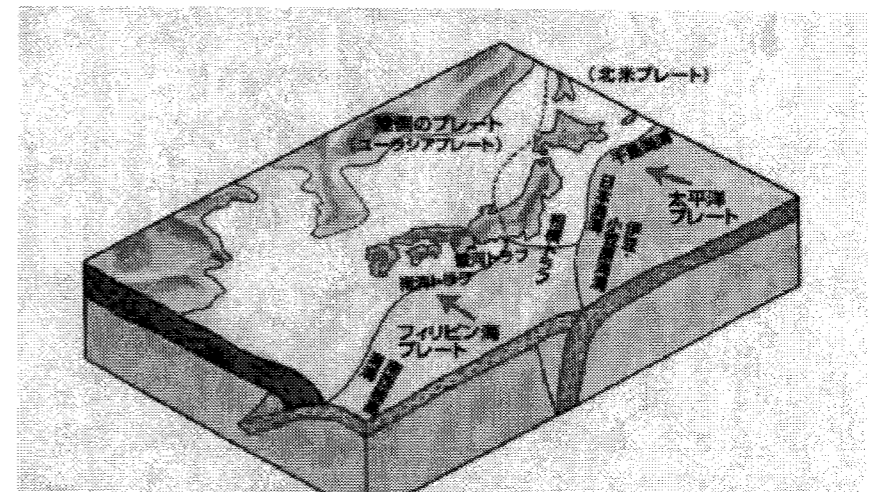
そこで、この地震が起こる海溝やトラフのところだけをさらにクローズアップしてみます。どうしているかということ、図-2に示すように、海底が沈み込んでいき、陸が止まっているので、その境のところには摩擦があり、そこは滑っているわけではなく、いつもはくっついていて引きずり込まれていきます。1年に7~8cm引っ張り込まれますので、100年たつと7~8m引きずり込まれることになり、硬い岩盤は変形ができなくなって、もとの境界のところで滑ることになります。それが地震となるのです。このズルットと滑るというのは非常に速く、7~8mを大体十秒くらいで元に戻ります。これが地震となって伝わっていき、また、このとき海底で水をかき回すので、それが津波となるのです。これがこの付近の海溝で起こる地震のすべてです。

海底は非常に単純に沈み込んで行っており、その速度はどこで測っても数センチから多くても8cm位、100年も経てば7~8mも食い違いが出てきてしまうので、それを解消するために地震が起こることになっているのです。南海トラフの東の端というのが駿河湾であり、東海地震の発生する場所の候補となっているのです。

というわけで、海溝型の地震は、年間8cmくらいの速度で太平洋海底

図-2 日本付近に潜り込む太平洋プレートとフィリピン海プレート

太平洋プレートは1年に8cmの速度で日本に向け進んできて、日本海溝で沈んでいく。フィリピン海プレートは年6cmの速度で進んできて、南海トラフで沈んでいく



の岩盤が日本の下に沈んでいき、御前崎や四国の半島付近は引きずり込まれるが、100年も経つと耐え切れなくなって滑るという。これは非常に単純な組合せで起っています。100年が120年になったらおかしいのかというのではなくて、およそ100年で起こりますよ、ということです。

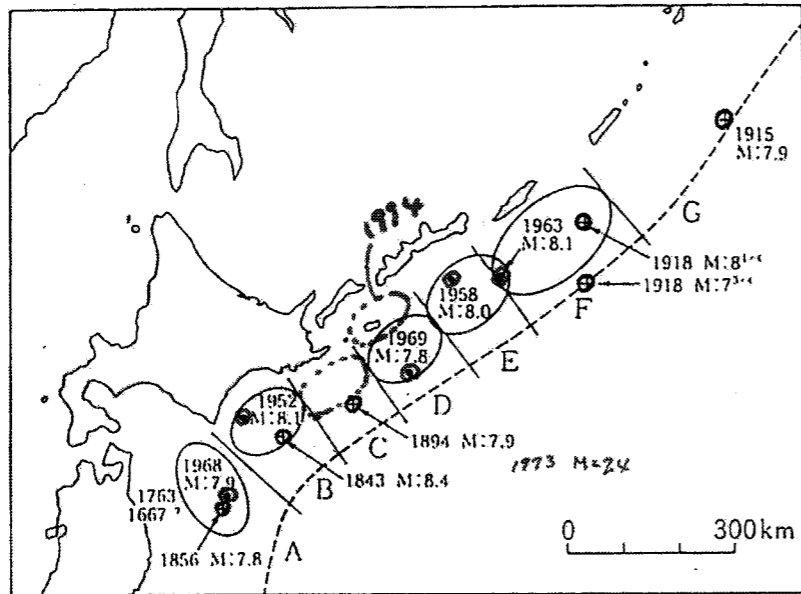
日本付近の巨大地震は太平洋側で起こります。内陸で起るのは比較的小さな地震です。日本海側にも大きな地震が起りますが、ここにも海底の岩盤のもぐりこみが始まっている場所があるのですが、話がちょっとややこしくなってしまうので、まあ眼をつぶることにしましょう。

#### 海溝型地震は約100年の周期で繰り返す

当時北海道大学の先生で、後の名古屋大学の教授であった宇津先生は、1972年、図-3に示すように、北海道沖の海溝で起る地震は約100年

図一3 繰り返す北海道南東沖の地震

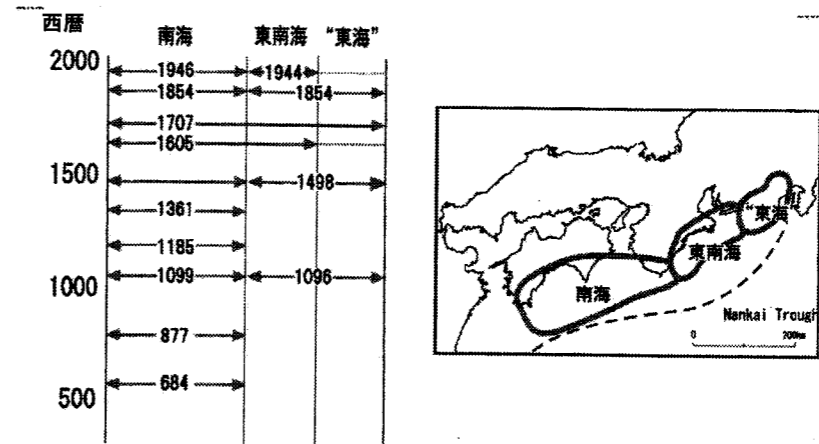
海溝の大地震は約100年で繰り返す



の間隔で繰り返し同じところで起こっていることを示し、最近 100 年間地震が起こっていない場所があることを論文に書かれました。北海道の沖で 1894 年に 7.9 というのが起こっているのが最近起こっていない場所があるというのです。その場所に 1973 年に地震が起こりました。

東海地方においては 1944 年に大きな地震が起こりました。これは、東南海地震で、私よりちょっと上の先輩はご存知かと思います。1946 年には南海地震も起こりました。そのときにいつもだったら、御前崎から駿河湾にかけて同時に地震が起こってしまうのですが、1944 年には起こらなかったのです。前回の南海、東南海地震は 1854 年に 2 日違いで起こっています。このときは御前崎から東の地域も一緒に地震を起こしています。さらにその前は 1707 年とみてみると、図一4 に南海地震、東南海地震、東海地震が起こった年を示すように、少なくとも歴史上信頼できるものでは 100 年ちょっとで南海、東南海地震は起こっています。ところが、御前崎の東側は 1944 年には地震を起こさなかったで、

繰り返す南海、東南海、東海地震



矢印と数字はその年に南海、東南海、東海などの地震が起こったことを示します

不規則な形の囲みはそれぞれの震源域を示す

そろそろ起こるのじゃあないかというのが、そもそもの始まりです。前回の地震の 1854 年から勘定すると、もう 150 年近くになってしまいました。だから、今から 20 年くらい前にもう 120 年経っていたので、宇津先生は、ここはちょっと怖いよといったわけです。ところがよくみると、東海地震に相当する地震だけが単独で起こっている例はこれまでにないです。これまで東海地域の地震は、一回飛ばしになるか東南海地震と一緒に起こっていました。だから、今回も一回飛ばしで、次の東南海地震のとき同時に時に起る可能性が高いのです。

じゃあ、それが何時かという、そんなに先の話ではなく、前回の東南海地震は 1944 年に起こりました。前の地震でエネルギーがちょっと残っていたとすると、次の地震の発生は早くなるので、次の地震は 80 年後に起こるかもしれません。そうすると、すでにもう 60 年経っているので、あと 20 年、30 年経つと、この危険区域に入ってきます。最近、東南海地震もこわいよと、いろいろな人が言い始めたのは、そのためです。この地震は一回飛ばしされることはありえないので必ず起こります。このときに東海地震も一緒に起こるのではないかなあと、私は思っています。

## 地震の前兆？

よって、東海地震がずっと起こらなくても 30 年後には絶対起こりますよ、ということになります。それまでは起こらないとしても地震の前兆があるのかというと、これが実は確信がもてないのです。正直なところは、東海地震の予知はかなり難しいと思います。いくつか、頼りになる例もあります。1つは新潟地震の例です。この地震は 1964 年の地震のことですが、海溝型の地震です。さきほど日本海側には巨大な地震はありませんねといいましたが、中規模の地震です。新潟はご存知のように、天然ガスを一杯採っているので、当時は地盤沈下がひどく、地盤沈下を調査するための測量が綿密にやってあった。これがそのときのデータですが、1900 年位から観測があつて、1960 年頃に地盤沈下の様子が急激に変わってから地震が発生しました。この地震の場合は、地面の変動が 1~2 年前に非常に大きく変動し始め、それから地震が起こったということが分かります。すなわち、大きな地震が起こる直前には、すくなくともこれくらい近くで観測しておれば、なにか地面の変動が観測できるでしょう、というのが 1 つの頼りです。確信は全然ないですが。

それからもう 1 つ、1944 年の東南海地震のときです。その時、御前崎のところで、当時の陸軍が測量をやっていました。なんで、そんなところで測量をやっていたかということ、どうも地震学者がやらせた、やるように勧めたという話です。なぜ勧めたかまではわかりませんが、たまたま、そのところで何か地球物理の人が興味があつて、観測を軍にやらせていたらしいのですが、その時はちょうど地震の 1~2 日前です。地震が起こる 1 時間前、2 時間前の測量の記録（現地の当時の日記がつけてある）をみると、このところで測量の機械のセットが出来なくなってしまうということが書いてある。それはどういうことかといいますと、測量というのは望遠鏡を水平に保って少し離れたところのものさしで高さを読むのですが、地面が変動してしまって望遠鏡をきちんと水平に保てなくて、スルスルと動いてしまったと記してあります。

その時の読み取りデータもいくつか残ってしまつて、2~3 日前から地面が動き始めて地震が起こったということが事実らしいのです。ただ、地震の後でノートを整理しているので、かなりあやしい部分があるので

すが、我々は頼るものはこの事実のみです。最近、測量を経験した人たちが原簿に戻って調査していますが、まあ、まんざらでたらめでなさそうなので、期待できるということです。というわけで、東海地震の前兆として期待できるのは、この 2 つくらいなのです。

現在、御前崎の付近では毎年測量が行われていて、御前崎の先端は年々沈み込んでいます。フィリピン海の海底の潜り込みに引きずられているのです。1970 年からの 30 年間に 25cm くらい、大体 1 年に 1cm くらいの速度で御前崎はずうっと沈んでいます。そういう状況が測量から見えています。

この沈み込んだものがぼんと跳ね上がって地震が起こることなので、この沈み込みを一生懸命に見ていけば、新潟の例のように 1~2 年前から変なことが起るのではないかと期待される。

現在、私も地震予知連絡会の委員で、いろいろなところから出てくる、例えば測量結果などに異常があると、ちょっと内緒にしておこうかという部分があります。実際はなにも起こらず、よかつたねというようなことを繰り返しているのです。それが異常なのかどうか確信を持って判断できないのです。測量の分野は、最近はものすごく便利になりました。それは、皆さんもカーナビでご存知の、GPS 人工衛星を利用する方法です。いま、アメリカの GPS 人工衛星が 24 個くらい飛んでおり、つねに、7~8 個が見えるようになっています。その衛星からの電波を観測することによって、GPS 人工衛星が“衛星はいまどこにいますよ”ということを放送しながら飛んでいくので、いくつかの GPS 衛星を同時に観測して自分がどこにいるかを計算することができます。車ですと、せいぜい道を間違えなければ良いのですが、地震予知で必要なのは、1~2cm ということですから、1~2mm の精度でないと困ります。この人工衛星はかなりの優れもので、たとえば、名古屋と静岡の間で距離をとって、2 つの間の距離が変化したかどうかを見てみると、1 年間に 1mm くらい動いているのが見えます。という優れものですので、今は、ややこしい測量をやる必要がぜんぜんなくて、人工衛星をずっと観測し、あとで数字を解析してみれば、距離が変化したか、上下の変動までも分かるのです。現在はたくさんの観測点で、30 秒に 1 回ずつ測っています。水準測量ですと、静岡県は 1 年間に 4 回やっているのですが、とんでも



なくお金がかかります。これは、30秒に1回、衛星の観測をしておけば分かるということになりました。

GPS衛星の観測によれば御前崎付近は年に5cmくらい北西に動いています。その様子は浜松、豊橋付近においても同じです。しかし、内陸に行くほど動きは小さくなり、日本海側ではほとんど動いていません。よって、太平洋側は大きく変形していることとなります。エネルギーがたまっているのです。上下の変動もGPS観測で分かります。要するに、年4回の測量から、30秒毎の観測に変わったのです。もし、前兆があるものならば、この観測で捕まるはずです。

ところが、最近になって、変だよということがありました。それこそ、本当は地震が起こりそうだという変化です。御前崎にまでは及んでいませんが、浜松、豊橋の広い範囲で、2000年頃から、これまでの北西方向の動きと異なる動きが観測されるようになりました。東海地震の予想される震源より西のところで、潜り込んだフィリピン海の海底と日本の岩盤との境が地震を起こさず少し滑ってように思われるのです。この現象は今も続いています。東海地震の前兆ではないという明快な理由は無いようです。しかし、大地震にはつながらないようだとなんとなくみんな思っています。同様なことは日本のほかの地域においても、アメリカでも見つかっています。

そんなわけで、私は“今観測されている動きと地震の直前の変動とどうやって区別するのだろう”と心配しています。だから“大丈夫ではないかと思う”と知っているうちに地震が起こってしまって、あぁしまったということが多分あるのではないかと、私は心配しています。そんなことを言うと周りからしかられるので、余り言いたくないのですが、正直なところはそういう状況です。

ということで、非常にはっきりしていることは、100年に1回、大地震が起こること。これは何度も言うように、われわれの時間スケールでいうと80年だか120年だかはっきりわからない。そんないいかげんじゃ困る、ということですが、100年プラスマイナス20年で考えておいたらよいでしょう。場所も、海の地震の場合は予想もしない場所で起こるというのは、ほとんどないので、心配な場所を狙って観測しています。だから“まあ、多分何かはあるでしょうね”ということです。

ところが、1年前に北海道の十勝沖で非常に大きな地震がありました。北海道の、特に十勝地方は人があまり住んでいないということと、北海道の場合ずっと沖のほうで地震が起きるので、被害も石油タンクが燃えたくらいで、あまり大きな被害が無かったのが幸いでした。実は、この地震が起こったときに前兆がぜんぜんなかったのです。東海地域ほどではないものの、一生懸命観測していたのに何も前兆は観測されていません。だから、本当のところ、ますます“ひょっとしたら地震の前兆は無いかもしれない”と私は思っています。

ですから、皆さんもあまり地震予知が出来るとか東海地震が予知されると、信じ込まないで“うまくいったら予知される“くらいに思っていてください。

#### 地震の予知

ただ、何度もいますが、海の大地震は場所とか、起こる期間はほとんど分かっているから、それに対して、地震の波がどうなる、どんな波がきますよ、ということは、今の科学を使えば予測できます。それから、地盤の特性みたいなものがよくわかります。耐震設計も非常によく進んでいるので、地震が起こっても大丈夫なように準備しておくことができることとなります。たとえ予知されたとしても地震を回避することはできません。地震は必ず起きますので、準備が大事になります。準備をしておけば、ひとまず安心ということがあります。

ということで、東海地震が単独で起こることは無いとしても、1944年の取り残しがあるもので、次に起こる東南海地震が早まって、これが一緒に起これば、“これから30年くらいの間には必ず起こるでしょう”ということになります。

というので、まず、海の大地震については、起こる場所も地盤の性質もよく分かっています。地盤の悪いところは良いところに比べて10倍くらい揺れると想定されます。だから、地盤の悪い所に住んでいる限りは、地震が来るとめっちゃくちゃ揺れますよということです。揺れが10倍くらいになるということを勘定に入れて、東海地震が起こったらどう揺れますか、東海地震と東南海地震が連動して起こると、愛知県ではどう揺れるのか、強いところで震度6ぐらいと予想されています。震度6

強くらいですから、新潟中越地震のかなり被害の起こった地域に相当します。その周囲にかなり広い範囲で震度6弱の地域が広がっています。これぐらいのことが分かっているならば、そのように準備しておけばよいのです。

内陸型の地震は、これとは別で、何時起こるか分からないというのがあります。内陸型の地震は、5千年から1万年に1回くらいしか起こらないのです。例えば、1891年に濃尾地震、これは巨大な内陸型の地震です、が起こったのですが、その前いつ起きたかはよく分かっていません。3千年か4千年前に起こったことらしいというくらいです。こういう内陸型の地震が起こる場所には活断層があるのですが、それが5千年か1万年に1回しか起こらないので、前回、何が起こったのかわからないのです。

だから、準備しておく以外、手立てがありません。活断層というのはものすごく沢山あるので観測しようとしてもすべての断層を観測することができません。ということで、直下型の地震（内陸地震）についての予知はお手上げです。よくいわれますが“新潟の中越地震とか神戸の地震のときに全く予知できなかったのか？”というのは、そもそも、予知する資料が全く無い状態なのです。そういう地震が予知できる体制には、日本の場合だけでなく、世界中どこでもなっていないので、出来るはずがないのです。予知が出来るから、予知されたらどうしようという手続きが決まっているのは、東海地震の場合だけであって、南海、東南海でも一切そういうものには組み込まれていません。

活断層は中部地方から近畿にかけて沢山あります。あまりたくさんあるので調査されたものはまだわずかです。何らかの観測が行われている断層はほとんどありません。それを1つ1つ調べることは出来ないで、結局はどこで地震が起こってもおかしくないということです。全くいまのところはお手上げの状態です。さらに、新潟中越地震の場合もそうでしたが、その地域に活断層がいっぱいあることが分かっていたのですが、知られていた断層ではない所で起こっています。こういうリストに載っていない断層もいっぱいあると言われていました。

## 地震の被害

地震がひとたび起こると、色々な被害が起こるわけですが、地震が直接ものを壊してしまう場合。火災が起こるとか、がけ崩れとか、中越地震においても非常に大きな被害を起こしました。

津波も起こります。津波は内陸の地震では起こりませんが、海の地震の場合は多くの地震で津波が起こります。東海地震とか東南海地震が起こると、太平洋側の渥美半島や伊勢から外側の海では、数mから10mの津波が来ます。伊勢湾の内側にはそんな大きな津波は来ないと思われまます。それにしても海の地震の場合は津波がこわい。

液状化現象。これは厄介なものです。水を含んだ地面がゆすられることによってドロドロになってしまうことを言い、地盤としての強度が無くなってしまいます。

## 地震動による災害

大きな揺れにより建物などが壊れるというのはこういうものです。兵庫県南部地震では高速道路とか新幹線の橋も壊れました。設計の強度が足りなかったのです。地震で、それほど大きな揺れが来ると思っていなかったか、分かっていたが設計強度が足りなかったのか、です。それは地震を研究するものと建物等を設計する人のコミュニケーションがとれていなかったからです。建物を作る人は“そんな大きな地震動なんて来ない”とっていて、地震を観測する者は“そのデータからその程度はあたりまえだ”といているという食い違いがありました。そういうことが段々なくなってくれば、建物などは頑丈に出来るようになるでしょう。人の集まる場所や新幹線の橋などは壊れてはならないものです。

## 新幹線の安全性

中越地震のときに新幹線が脱線しました。これも新幹線を皆さんがあまりにも信用しすぎ、地震が起こっても何も起こらないだろうといているのですが、それはそんなはずがないことが、中越地震でよく分かりました。しかし、あれは非常にラッキーだったというほかはない。

新幹線を止めるブレーキはどうなっているのでしょうか。地震で新幹線を止める原理は、地震波にはP波とS波があって、P波はS波より伝

わる速度が速いが、揺れの大きさはS波の方が数倍大きいので、P波を感じたときにブレーキをかけてS波の到着までに列車を止めようというものです。P波の速度はS波の約1.7倍の速度ですから、P波がきてS波が来るまでにはそれほど時間の余裕はありません。中越地震のときは震源から新幹線の線路まで10kmとか20km程度ですから、P波とS波の時間差は新幹線の線路付近では3秒か4秒くらいの差です。新幹線は3秒や4秒で止まれるわけは無いでしょう。いくらこの装置が賢くても、P波が来ないことには列車を止めてくれませんので、明らかに、脱線してしまったのです。要するに、この装置では直下型地震の場合は列車をとめることができなかったのです。

もう1つの方法は、地震が遠くで起こった場合に有効な方法です。たとえば、100km遠方で起こった地震の場合、揺れは(P波は)毎時約6kmのスピードで15秒ほどかかってやってくるので、震源付近で地震を感じたときに周りの列車を止めてしまえば遠くの列車は地震の揺れがくるまでに止まることができるのです。

足元で起こった地震に対してはP波とS波の到着時間差しかないのに、絶望的であるのに、新幹線は止まるようなつもりで皆さんは乗っていた。そんなはずはないのです。東海道新幹線だって同じことで、もし静岡で東海地震じゃあなくて近い地震が起こったとすると、やっぱり止まらずに走って行ってしまいます。ですから、上越新幹線と同じようなことが起こります。一方、以前から橋は直さなくちゃあいけないといっているのに、今回(中越地震)も橋脚が壊れました。これくらい大きな地震がくるといことがわかっていれば、壊れないようにできるわけで、早く対策を取る必要があります。要するに、いまのシステムでは、新幹線は直下型の地震では止まりません。

地震のとき新幹線が脱線したのは今回が初めてかということ、そうではなくて、阪神大震災のときに、車庫に入っていた新幹線の車両が脱線していたそうです。止まっていた列車が脱線していたということです。電車というのはスプリングの上に乗っているもので、地震が来ると共振という現象を起こしてポンと外へ飛び出してしまうということがあろうというのです。

## 火災

地震時に火を出さなければ千人クラスの死者はほとんど出ません。大体10人とか100人くらいですむはずなのですが、火が出ると途端に千人クラスの死者がでます。だから、地震のときに火事を出さないように何とかしたい、すべきだと私は思うのです。ストーブなどは、家がつぶれば同時につぶれ、まだ熱いから燃えるでしょうね。そんなときにも燃え上がらない工夫をすることが必要です。私は最近、地震予知よりそういうことをちゃんとした方がいいのではないかと、という気がするようになりました。

まさかと思う火災があります。北海道南西沖地震で、奥尻島に津波が襲った直後、広域の火災が起こりました。津波がきたときに油が流れ出し、海の上で火がつき、火の海になってしまったのです。津波のときに火事が起こった例はかなりあるようです。これも何とか防ぐ方策がありそうです。

## がけ崩れ

地震に伴う大規模ながけ崩れは、我々が知恵を絞っても防ぐ方法がないですね。過去にも地震のときに山が崩れて大きな災害、被害を起こしたという例はいっぱいあります。しかし、火災の場合のように、千人単位の犠牲者にはならないのであまり取り上げられていないですけど、例えば1984年の長野県西部地震では御嶽山の山腹が崩れ落ち、数人の人が犠牲になりました。また善光寺地震(1847年)のときには山が崩れて大きなダムができ、これが決壊して下流で大洪水が起きたということがあります。非常に稀なことでもなく、よく起こる山間地での地震災害です。しかし、人の死ぬ数というところで、被害の大きさを表現すると、この場合は小さな災害となってしまうわけです。がけ崩れは巨大なエネルギーで、山がまるまる無くなってしまうというようなことですから、たとえ何をしても助からないだろうという気がします。これを我々が何とかしようとするのは、無理だなあという気がします。

断層ができたとき、どれくらいのことが起るかということ、濃尾地震の時の岐阜県根尾村での断層を考えると、断層を境に片方の地面が3m持ちあがっています。こんなことが起るので、これはなんともしよう

が無いでしょう。今だと、ここに水道や下水が通って、電線が通っているわけで、いくら頑丈にしてあったとしても、岩盤もろとも引き裂かれてしまうわけですから、人の力ではなんともできないと思います。

中越地震の被害を見ると、山全体が壊れてしまうわけですから、我々の力では何とも仕様が無いでしょう。というところで、地震時の火災まではなんとか防ぎましようというのが、私の思いです。

### 津波

名古屋市は伊勢湾の中であり、津波の襲来はそんなに心配することはないのですが、ひとたび外へ出ると、津波にどこで出会うのか分かりません。釣りに行ったり、そこに遊びに行った人が津波で被害に会うことが多いのです。だから、我々は津波の知識を持っていないといけないのです。津波というのは、沖ではすごく速く伝わり、ジェット機のようなスピードでやってくる。海岸近くでは人がやっとな逃げられるくらいのスピードになります。要するに、津波が押し寄せてくる速度は海の深さによって変わります。陸に近づくと速度が遅くなり、交通渋滞が起こったように海水が競りあがって大津波となるのです。津波の高さは、沖合いでの何10倍にもなります。

なにしろ、やっとな逃げられる程度なので、海辺にいて地震が起ったら、考える前になにが何でも逃げるのが先決問題です。

奥尻の例でも大きな船が流され、かなり高いところまで押し上げられています。津波の高さがせいぜい5mであっても競りあがってくるので、その場で考えることなく、逃げる場所は決めておかなければ間に合いませんと思われま

### 液状化現象

それから、もう1つは、液状化という厄介な現象があります。この現象はそんなに珍しいことではなくて、いつも起るものです。新潟地震の例では、砂の上に立っていた5、6階建てのアパートが、(勿論砂の上といっても、ある程度の処理がしてあると思いますが、)全体が液状化を起こしてしまったために、アパートはゴロンとひっくり返ってしまいました。新潟空港は確か2階までなくなりました。そのまま埋まっ

てしまったようです。神戸の地震の場合も、ウォーターフロント、人間が埋めた島が被害を受けました。なぜそんなことが起るかという、昔農家の人がやっていたように四角い枘の中にお米を入れて、買うときにはトントンと叩いてたくさん入れ、売るときはそっと一杯にする、あの原理です。あれは米と空気ですけど、地震の場合は砂と水ですね。水をたっぷり含んだ砂地に家が建っていると、これをゆすってやると、枘の中の米と原理と同じように、トントンと叩かれると、砂は下へ沈み水が出てくるのです。上の建物はズブズブと沈んでしまうのです。これが液状化現象です。

それはどういうところで起るかという、人が作った地面、埋立地で起こります。名古屋港の周辺では間違いなく起こります。結構見逃されるのは、河川、川が埋められたところ、昔川原だった場所などです。千年も2千年も昔に川原だったところで、今は住宅地になっている場所で、いまは面影も全くなく、川原であったことなどわからないのですが、そういうところでも液状化現象は起こります。

要するに、そっと埋められたことによって隙間がいっぱいあり、水で持っているような地盤のところ

に地震が起こると液状化が起こります。下水のマンホールが道路から浮き上がってしまっている写真がたまに出てくるのですか、あれが液状化現象です。下水の中というのは、ちょっとだけ水があって空洞化で、軽いから、全体が水と一緒に浮いてきてしまうのです。地震時の液状化現象というのも、こういうことが起るよということがよくわかっていますので、これに対処する方法をちゃんと考える必要があると思います。例えば、埋め立てのときの工事の方法などで対処の仕方を考えることが必要です。大きな建物は深いところにある硬い地盤に達するまで杭をうってしまおうと建物は助かるようです。神戸の地震の時はそうでした。こういう液状化についても、よくよく考えて準備しておく必要もある。

### 地震への備え

要するに、地震の災害では、予測ができる部分もかなりあります。海溝の地震だと震源の位置も揺れの大きさも予測できますので、あらかじめ防災対策をしておくことができます。東海地震や東南海地震の場合に

については場所も被害の予測も出ていますので、それに見合った耐震化をしておくことがかなり重要になってきます。

それから、直下型の地震は、ほとんど不意打ちでやってきますので、予測は不可能です。でも、町全体を丈夫なものにしておくことが重要なことです。備えはかなり有効です。例えば避難場所になるところが震災にあってはならないのです。

個々の家においてもできることはたくさんあります。例えば我々の研究室では棚は全部壁につけてあります。本が落ちないように留め金がついています。いろいろな防災用のものが売られていますので、こういった物を利用することも大切です。自分の家を考えてみると、ストーブとか電気の配線とか火が出ないというのが、かなり重要なことです。ほとんどの犠牲者の場合、家がつぶれて下敷きになっているので、家の補強も重要です。家具の下敷きになると、瞬間に逃げられないので、たとえば火が出た場合犠牲になるというのがかなりあるようです。家具は、そんなにすごいことをしなくても、柱に大きな釘でも打って縛っておけば、倒れてくることは無いので、それくらいのことは自分で出来、やっておくことが有効です。最近の日曜大工の店へいくと、防災用のものもいろいろ売られていますので、そういうものを使って、自分の住んでいる場所くらいは何とかするということが重要なことです。

公共の建物とか橋など初めから壊れては困るものは、壊れないように作っていくということは、重要なことなので、ぜひそういうことをやっていただきたいと思います。

備えが全然ないところありますよ、という極端な、これはサハリンの地震の例です。新しいアパートはちょっとの被害で済みましたが、ソ連時代の古いアパートはこれ、本当に瓦礫の山と化してしまいました。私はカムチャッカにロシアの火山研究所と共同で運営している地震観測所があり、よく行くのですが、カムチャックでも全く同じことです。

ソ連時代には建物はモスクワを基準で作られ、モスクワというのは全然地震が起らないところなので、耐震ということはまったく考えに入れられていません。壁の中をながめてみますと、3階、4階の建物でも、普通の木の柱に漆喰が、要するに、日本の木造みたいな建物です。寒いのですごく厚い壁で、重い建物ができていますので、地震には耐えられ

ないので、全部本当に見事に壊れていました。こういった状況についてはカムチャッカの私の友人たちも、研究所の研究者たちも皆、非常に困っていました。これは極端な例ですけど、備えが無いと、ちょっとした地震においても大変なことになってしまいます。たとえ小さなことでも、できることから準備をしておくことが大事です。東海地震とか何とかは別として、可能な限り、色々なところで、自分で出来ることは準備をし、耐震性ということも、皆さんここでぜひ考えておいて頂きたいと思っています。(紙面の制約で一部の図表が掲載できませんでした。)

随想

## 50年を過ぎて



市川 芳彦  
(留学年次 1954)

空襲で焼け落ちた東北大学理学部の物理教室の廃墟に、戦後間もなく赴任された木村一治先生がアメリカのコーネル大学の原子核研究所にフルブライト交流プログラムの資金を得て渡米されたのは、昭和28年の夏でした。当時、ベトナムでは Dien Bien Phu からフランス軍が撤退、コーネル大学のキャンパスでは若い世代が草の根の平和運動を熱心に展開している時でした。一方では、マッカーシー旋風が吹き荒れている最中、マンハッタン計画の指導者だったオッペンハイマー教授が聴聞会で有罪と判定されすべての公職から追放されたのが1954年6月、コーネルの原子核研究所では、オッペンハイマー教授の擁護のためにベーテ教授が「オッペンハイマー教授の公職からの追放は、アメリカの良識と叡智の終末を意味する」という強い口調の講演を聞く機会を得て、木村先生も原子力委員会への抗議文に署名をして1ドルの寄付をしたと思ひ出「LIVING with NUCLEI」に書き記しておられます。1949年8月23日、ソ連邦が原子爆弾のテストに成功、トルーマン大統領は1950年1月30日、水素爆弾の開発命令に署名、1954年3月南太平洋でのアメリカの水素爆弾の実験の灰を被った第5福竜丸の久保山愛吉さんが9月23日に死亡、という事件が起こったという年でした。豊かなアメリカの研究所生活に感じられた先生は、私にはコーネル大学、友人の千葉廉君にはウィスコンシン大学の大学院に留学できるようにと、それぞれの大学院の研究補助員の枠を確保してくださり、旅費をフルブライト交流資金から得るように試験を受けることを勧められました。

専攻を原子核物理学と書いたために、ヴィザの発給が遅れ、昭和29年、その年の氷川丸が出帆したあと、羽田から4発のプロペラ機で夜10時ごろ離陸、翌朝、太平洋にぽつんと浮かぶウエーキ島に着陸、砂浜に横たわる赤く錆びついている船舶の残骸に、この戦争に散った多く

の生命の無念さを偲ぶ。朝食の後ハワイにむけて出発、ハワイ到着は夜8時ごろだったでしょうか、入国手続きをして直ぐ出発、サンフランシスコに到着したのは二日目の朝でした。今では、成田からアメリカ本土の主要都市までひとつ飛びですが、空の旅のこの50年の間の進歩には驚くばかりです。

イサカの町に到着、木村先生の顔を見て、ホットした私でしたが、「ベーテと議論しているのだけれど、意見が合わなくて、怒らせたので、君がとぼちちりを受けるかもしれないよ。」といわれる先生でした。久保山さんの被爆について、ベーテ先生と何度か議論を繰り返しておられたようで、ベーテ先生の「久保山さんをアメリカに連れてきて、適切な輸血治療を施せば、死亡しなかっただろう」というお話に、木村先生は「久保山さん一人の生命が救われるかどうかということが問題なのではなく、これから起こるかもしれない10個の原子爆弾の攻撃によって傷つく100万人の人の生命の問題である」と主張され、また「実験領域の海水の放射能汚染は、海の大量の水で希釈されてしまう」というベーテ先生の主張には、「草むらに死んでいる鼠の匂いを空を舞う鳶がかぎつけて急降下して、啜えて舞い上がるという例から、そう簡単に汚染は希釈されない」と反論されるなど、かなりムキになって議論を続けたらしいのです。

ベーテ先生にお会いして、「いろいろご指導いただき、討論できる機会を楽しみにしています」と御挨拶申し上げた私に「YES, BUT ONLY ABOUT PHYSICS.」と答えられたベーテ先生の声が今でも耳元に響いている思いがします。木村先生との議論から、ビキニ環礁での水爆実験の問題に日本人が強い関心を持っていると思い、予めそのように釘をさされたのでしょうか？

キャンパスで開かれる週末のいろいろな催しに参加したある日、フィリッピンからの女子留学生に、「私の父は、日本兵に殺された」と言われて、答える言葉も見つからず、息を呑んだこと、アフリカのナイジェリアから来たという少し年配のご婦人から、「貴方は日本人か？」と声をかけられ「はい」と答えると、「私は小学校の先生なのだけれど、戦争中の日本の神風攻撃はすばらしかった、国を守るために自分の命を捧げるほど、国を愛する事が尊いということを、私は一生懸命教えているの」

と私の肩を抱きかかえるようにして話しかけてくるのでした。

50年を過ぎて、フルブライトの同窓会に久しぶりに出席して、いろいろな友人たちとの出会いや忘れられない事などを思い出す中で、何故か此処に記した三人の言葉が忘れられない言葉として蘇ってくるのです。戦後半世紀、今も燻り続けるイスラエルとパレスチナの間の抗争、ソ連邦崩壊の後、冷戦の終結による明るい世界の到来も束の間、体制の変動が誘発したチェチェンその他の地域での民族紛争など、相変わらずの世界情勢に人間の歴史とは何なのかと懐疑的になっている、将にその最中、2001年9月11日の世界貿易センタービルへの2機の旅客機の突入は、「米国の安全のために、米軍は国外で戦う」という主張が近代文明の頂点にたつと自認するアメリカにとっては当然の事として受け入れられ、一気にアメリカ全土に好戦的な空気が漲ってしまったような印象を持たされたのは、私だけではなかったと思います。

そのような時に、「アメリカの人たちの本当の気持ちはどうなのだろうか？」という疑問に適切に答えてくれる記事を9月9日付けの中日新聞夕刊の文化欄に読むことが出来たのは嬉しい事でした。「9・11以後の世界」について「米国の高校生だった私」と題する岡崎玲子さんの記事は普通の新聞やテレビなどでは伝えられないアメリカの人たちや、彼女が留学した高校のクラスメートたちの率直な意識を伝えている事に強く心を打たれたのです。彼女の記事をそのまま、此処に引用させていただき、私を感じたことをお伝えしたいと思います。

“超大国を覆った不安感が憎しみへと変わり、軍事的措置が次々と実行に移される中、私は2003年6月の卒業まで東海岸に残った。その間、『我々の味わった悲しみが拡散するような武力行使を許してはならない』と語っているのは、身近なニュー Yorker たち。声は震えていても、彼らの決意は、国民の恐怖や怒りを煽るばかりの政府やメディアから発せられるメッセージより力強く響いた。”さらに彼女は言葉を続けて、“海外と国内両方における政策に、疑問を投げかける義務を怠ったマスメディアが自己批判を始めるまでには、長い月日を要することとなる。”と鋭い指摘を展開していました。チョート・ローズマリー・ホール校を昨年6月に卒業したばかりの若い新鮮な洞察力の閃きを発見して、私は何か明るい希望を感じる事が出来たのです。

然し、最後に一言。“先ず、侵略戦争はいつも「自衛」の名目で始められる。次に、「戦時体制」が敷かれてしまえば、誰も反対はできない。最後に、一度失った信頼を回復することは極めて困難である。”と記す彼女は“これらを私は近年の米国での生活で体感したし、日本も二の舞を演じるのではないかと危惧せざるを得ない。”と書き記しているのですが、これらの事は、日本がこれから二の舞を演ずる事ではなく、実は満州事変に始まり、太平洋戦争で幕を閉じた日本の近代史そのものであったことを思うと、「二の舞」ではなく「再び同じ過ちを繰り返すこと」を危惧せざるを得ないのではないかと彼女に伝えたいのです。

フルブライト交流プログラムの恩恵を受けて、色々な国々の友人たちと知り合い、学び、身につけることのできた貴重な蓄積をどのようにしたら、次の世紀の担い手に伝えていけるであろうか、過ぎ去った50年を思い出しながら、時間の流れは非可逆的であることを噛み締めている次第です。 (2004, 10, 23)

## 大学キャンパスの風に吹かれて

梅沢時子

(留学年次 1968-1971)



私がフルブライターとしてカンザス州マンハッタン市街に位置する Kansas State University (略称 KSU) の College of Arts and Sciences の中の Department of English (英文学科) に大学院生として籍を置きました 1968 年という年は、米国ではキング牧師や大統領候補のロバート・ケネディが暗殺され、一方ベトナムでは北ベトナム軍と開放戦線が一斉蜂起し、開放戦線側によるサイゴンの米大使館の一時占拠、そして米軍との間に市街戦が行われた年でした。学内では sit-in という反戦を訴える座り込み抗議がありマンハッタン市街では抗議行進も発動されていました。当時の私はアメリカの大学生の抗議運動に学生の自由な表現の姿を見たものでした。

この年代には大学キャンパスの中で他の新しい変化も見られました。そのひとつに毎年 1 回 Home-Coming Day という同窓生がつどう大学祭のようなものが催されましたが、KSU キャンパスの女王 Home-Coming Queen の恒例の選出にあたって 1969 年に選ばれたのがインディアンと黒人の混血女性でした。私もしばしば顔を会わせたり話し会ったりもした大学生でしたが、顔も姿も美しく、知的で社会活動家的性格を持った人でした。ところが彼女のポスターが各所に貼られてあったのですが、それらの数枚に彼女に対する中傷的言辞「彼女よりもずっと美しい白人女性が幾人もいるよ」といった趣旨のいたずら書きがされました。大学当局はそれを重視し、いたずら書きの当人を調べ停学処分になりました。この出来事で感じたのは、大学生の中にもまだ美女の見方に人種的偏見があったことと、だが時代が変化しつつあり乗り越えようとしている風向きがあったことです。

当時の KSU を見ますと 62 カ国の外国から 500 人ほどの留学生が来ていました。私が所属した英文学科にはアジア人は私一人でしたが、科学系の学科にはアジア系やヨーロッパ系の世界各国からの学生たちが

いて、キャンパスが英語を通して世界のどの国の人とも話せるように国際化されていたことに新しさとそこに吹く風の流れを感じました。日本人学生も数人いたと思いますが、日本人教授はいなく、ただ、ずうっと以前の 1961 年に渡米され、KSU の物理学教室に勤務されていた大野氏がいらっしゃいました。氏は技術的に至難といわれるクライン・ボトルを世界で初めて作られたことで世界的評価を得ていらっしゃいましたが、氏は日本で習ってきた英語を一生懸命に話したときアメリカ人の同僚は「日本語を聞くと英語に似ているところがありますね」と言ったそうです。私よりも数年以上の年輩の人たちの多くは、学生時代に英語の音声に重点を置かない授業をお受けであったせいでしょう。英語によるコミュニケーションに腐心していらっしゃったようです。私としましては日本で英語関連の教育に携わってききましたので大野氏のエピソードは笑って済ませる出来事というよりも日本の英語指導の改善について考えさせられたことでした。そして私たちも日本語の他になにか別の共通語をも使えるようになれば世界の人々との交流に役立ち将来性に向かって開かれた途になるのではなかろうかと思ったものでした。

さて、アメリカの大学生活の中に開かれた国際性の風を感じたことのもひとつは、私の下宿部屋の隣室にいた Susan という米国人の KSU 女子学生のことです。同じ台所を使用しているうち仲良くなりましたが、彼女は授業の合間に図書館で時間給のアルバイトをしていました。私が期末ペーパー提出に多くの参考図書が必要としていたのを知って手助けに応じてくれました。そのとき、「一人の助教授が貸出し期限の切れた本をまだ返却していなかったから呼び出して返却させたのよ」と言って私が必要としたその本を持ってきてくれたのです。彼女は、規則に準じる公平な精神、私に対し外国人という差別をしない鷹揚な国際人的気質をもって接してくれたことに感動いたしました。

キャンパスの中には中国人、韓国人、ベトナム人、タイ人などのアジア人学生も見られ、その出会いや団欒もありましたが、Foreign Students Office を通して交流を始めたホスト・ファミリーに当たるご夫妻について申しますと、ご主人は KSU で教える理科系の教授でギリシャ人の血が混じったエジプト人、その奥さんはアメリカの大学で修士号を取られたドイツ人で、お二人とも外国の米国で国際結婚をなさった方たちでし



た。1968年以前から滞米していらっしゃるはずですから今年はまだ36年以上も住んでいらっしゃいますが、奥様の **Ita** に最近の米国大統領選挙について、ある質問をメールしましたところ、米市民になっていないので投票権をもっていないという返事でした。このことも、私に米国住民の多彩多様な国際的風景のありようについて身近に思い起こさせたことでした。

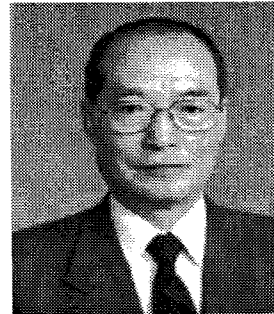
はばかりながら私は **KSU** で英米文学の修士号 (MA) を取得させていただきましたが、英米文学の履修者は私が最初のそしてただ一人のアジア人だったようです。振り返って考えますと外国から米国への留学生の知的関心の流れは文学よりは科学にあったのでしょうか。ところで **KSU** における英米文学の修士候補者に課せられている必修科目は非常に広範囲の文学上の時代区分を網羅したものであり、英文学と米文学の両方において、それらの初期から現代に至る範囲の取得単位数が設定されていましたから、外国人にとって直接に原語で、しかも各作品の全般を購読し内容を理解し分析し批評し独自の論点の意義を見出し発表することの要求に応えることは、日本における履修内容と比較し、かなり差のある量と質を感じました。さらに、フランス語購読のテストに合格すべき課題もありましたから、そのことは、2つの外国語間の意味関連をも探らなければならないという難関でした。しかし、それらの体験を概観しますと私にとりましては文学研究のプロセスの面白さを初めて感じたのでした。その探求と創造的過程の努力が楽しいものとさえ思えてきていました。しかし、帰国し就職しました大学では英語圏留学者は「英会話指導」が最適とする学内世論の疾風が吹いていましたので私はその風に吹き流された感があります。

今年三月に私は退職しましたが、**KSU** で米文学の指導を受けた **Walt Whitman** 専門の **Eitner** 教授や、**Ernest Hemingway** 専門の **Johnston** 教授を含め、下宿の友人 **Susan** やホスト・ファミリの付き合いのあった **Ita** ともメール交信などの交流を続けています。つい最近の米国大統領選挙の際に各州の選挙人投票数 “electoral votes” の内容について **Wisconsin** にいる **Marilyn** に質問メールしましたところ、ウィスコンシン州の「10票」というのは上院議員数2名と下院議員数8名のことですと答えてくれました。そして彼女個人としては選挙人団 “electoral

college”よりは一般多数による投票の方が良いと思うわと付け加えていました。事典を開けば事足りることかもしれませんが、現実に生活をしている人に直接聞くことで現実感を味わい異文化理解が深くできると思います。そして異文化間における互いの人間性が理解され、また、互いに世界の平和に対する基本姿勢を確かめることができ、留学体験が今も私の退職後の生活に刺激の風を送ってくれています。

## 留学時代の思い出

教員組織の日米差実感と変遷



江口 昇次

(留学年次1964-66)

私は1964~1966年にジョンズホプキンス大学 (Johns Hopkins University 以下 JHU) に博士研究員 (ポストドック以下 PD) として研究留学した。当時は米国第35代大統領 ジョン F. ケネディ (J. F. Kennedy) が暗殺された翌年で、大学のあるボルチモア市にも大統領の就任演説 LP や特集雑誌、書籍などが溢れており、JHU 到着前に受けたハワイ大学 East-West センターでのフルブライトオリエンテーション (The Fulbrighter in Chubu, No.13, 2003, p 43 参照) の英会話特訓での教官が、「ケネディ大統領の英語発音は独特である」という説明に興味があったので早速、購入してその演説を聴いたりしたことを思い出している。

私を PD として受け入れてくれたのは JHU 化学教室のエミール H. ホワイト教授 (故人) で当時、ホタルルシフェリン (ホタルの発光物質) を世界で始めて抽出単離し、構造も決定して世界的に注目されていた42歳の新進気鋭の教授であった。

当時、私は名古屋大学大学院理学研究科博士課程を満了して学位論文「ウミホタルルシフェリンの研究」を完成し、名大工 (故) 石井義郎研究室の助手に採用されて、2年目であったが米国への研究留学を強く望み、石井教授に是非ともと懇願して、何とか了承していただき推薦状も頂いた。また学位論文の指導教授 (故) 平田義正教授からも推薦状を頂き、さらに卒業研究で指導を受けた中西香爾先生 (当時助教授であり、ハーバード大学時代の友人ニコン教授がホワイト教授と JHU の同僚であった。現コロンビア大学教授) からは種々有益な情報やご助言もいただいて、生物発光分野の研究で注目されているホワイト教授の指導を受

けることになった。この思い出では当時のアメリカの一名門私立大学としての JHU で、化学教室 PD としての経験で感じたこと、特に日本の当時の国立大学との研究教育組織の差異を最近の大学教員組織制度改正案のニュースに関連して記してみたい。

当時の日米の格差は1ドル360円に象徴されるように経済的にも科学技術的にも歴然としており、フルブライト交流の趣旨と援助で多くの日本人、特に自然科学分野の若手研究者や芸術家などがまず米国留学を目指した。ハワイ大学 East-West センターでのオリエンテーションの思い出 (The Fulbrighter in Chubu, No.13, 2003, p 43 参照) に記したように、フルブライト合格者 (の一部) には米国の歴史、文化、生活、英会話などのオリエンテーション特訓教育があつて大変有益であった。勿論、この期間の宿泊施設利用の保障や生活費の支給があり、講師陣も非常に充実していると感じられた。

さて JHU ホワイト研究室の一員としてまず第一に驚いたのは、日本と異なって教授は PD (数名)、大学院生 (7~8名) をミーティングやセミナー及び個別ディスカッションを通して、全く一人で研究指導していることであった。これらの研究員には毎月の研究レポート提出が課せられていて、常に実験結果をチェックする体制である。ホワイト教授は自らも実験をしていたがこの姿勢は1999年77歳でなくなるまで続けられた。教授の下には共通の秘書がいるのみで、日本の当時の研究室 (講座) のように助教授、助手、技官、事務官に相当する職員はいない。研究に必要な器具、薬品、溶剤などは学科共通の倉庫・管理室で専任職員が保管管理するので、管理者にも使用者にも極めて効率的であった。日本でも近年はこのような使用・管理・保管体制が少なくとも薬品・溶剤類では普及してきている。

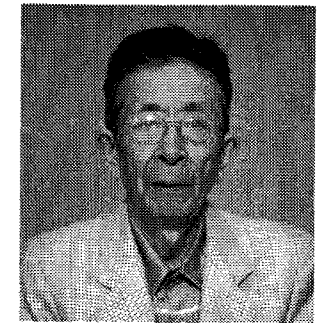
最近のニュースで、中教審 (中央教育審議会) の「大学の教員組織の在り方に関する検討委員会」が、助教授職を廃止して「准教授」というポストを新設する制度改正案をまとめたことが報道された。現行の学校教育法は助教授の職務を「教授の職務を助ける」と定めているが実際は独立して教育研究をする場合も多く存在して実態にそぐわず、国際的にも助教授名称は不適切との指摘である。助手についても、職務内容は現在、「教授および助教授の職務を助ける」となっているが、主な職務内容

を「自ら研究教育をする」人と「研究教育の補助者」に明確に分け（それぞれの名称は今後決めるといふ）、前者は准教授や教授につながるポストとして位置付けるよう求めた内容である。

40年前の日本は厳密な講座制時代であり、上のような職務内容の新米助手が米国留学を申し入れるのは当時は、極めて利己的で無理な希望であったことが、後ほどうすうす理解できてきて、不肖な助手の留学を許された石井先生には改めて感謝している次第である。なお助手の呼称が英文の推薦状で適切な表現がなく、推薦状を頂いた石井先生、平田先生の配慮で **Government Officer**（公務員）なる補足をつけていただいたことを記憶している。勿論、アメリカの他大学や **JHU** には「助手」のファカルティポストはなく、研究者としては **PD**（博士研究員）も **Assistant Professor** も任期付きの日本の助手に対応すると感じられた。実際に当時の **JHU** の若手の助教授 **Assistant Professor** は30歳前後で雇用にも任期があり、研究費、設備もかなり厳しい状況であることが徐々に判ってきた。例えば、実験器具・装置なども所有する教授の了承を得て借用して研究実験をしていたことを思い出す。そのようにしてでも研究成果を挙げて雇用の延長やより良い雇用条件、他の上級ポストなどへの審査のより高い評価を目指す状況であった。他方、**Associate Professor** 準教授のスタッフもいたが殆ど **(full) Professor** 教授と同等の研究条件（給与は別）かと思った。勿論、イギリス、フランス、ドイツなどそれぞれに伝統的大学の職名や任用形式があるので、日本の現行が正しく国際的にも理解され通用すれば助教授、助手の職名でもよいかもしいないが、問題は実情にそぐわない職務規定であろう。実際、助手で学位もあって研究教育に従事している場合には、英文名では **Assistant Professor** とする内部規定がいくつかの大学で認められ、国際的にも理解されて来ているのが実情であろう。しかし主要国立大学が大学院大学に改組され、留学生の増加と英文での紹介が必須となっている大学の国際交流の進展が助教授・助手の職務規定と矛盾する実情もさらけ出してきた。従って中教審の答申を踏まえて文部科学省が学校教育法を改正する方針とのことは当然であり、むしろその対応がやや遅すぎた感をもつ次第です。40年前に研究留学して感じた日米差として改めて思い出す一面です。

## 貴重な体験

堀部憲夫  
(留学年次 1966-67)



インディアナ大学に留学中に同じ名古屋出身というご縁でひとかたならずお世話になった篠田靖子様から久し振りにお電話を頂き、原稿の依頼を受け、お話をしているうちに、長い年月はスーツと消え去り、40年前の自分の留学時代にもどった。そのときのパスポートを見ると、1966年8月2日に羽田空港を出発して、ハワイ大学イーストウエストセンターでオリエンテーションを受けるためにハワイに飛んだ。

日本からの約20名の留学生がラテンアメリカや韓国、タイなどの東洋諸国からの留学生と共に、およそ1ヶ月間イーストウエストセンターの寮に泊まり、英会話、図書館の利用法、アメリカの歴史・文化などについての授業を受けた。情熱あふれる講師の授業は緊張がありながら楽しいものでした。特に、アメリカ文化についての講義は印象的で、フランスの政治学者トクビルの名著『アメリカにおける民主主義について』を引用して、授業はかなり程度の高いものだったという記憶があります。それ以外に、オアフ島の名所観光、カワイ島への旅行、日系人の家庭でのホームステイ、盆ダンスなど楽しい思い出が残っています。

9月初めに送別会があり、シカゴ経由でインディアナポリスに着き、そこからバスでインディアナ大学のあるブルーミントンに行き、まずは寮に落ち着きました。寮のルームメイトは法科大学院の学生で弁護士志望のユダヤ系アメリカ人で、大変な勉強家でした。毎晩のように、ユダヤ人の国家イスラエルのこと、ホロコーストのこと、ユダヤ教の礼拝所シナゴグのこと、土曜日の絶対安息日のこと、コーシャー食品のこと、アメリカにおけるユダヤ人のもつ力のことなど、ユダヤ文化についての講義と説教にはいささか閉口しましたが、1年間で多民族国家アメリカについて随分多くのことを学んだような気がします。

専門の言語学、英語教育については、留学した1966年という年は、チョムスキーの提唱する変形文法が1957年の「文法の構造」(**Syntactic Structures**)のモデルからいくつかの修正を受けて、1965年の「文法理

論の諸層」(Aspects of the Theory of Syntax) の出現となり、「標準理論」(Standard Theory) として位置付けを得た翌年のことであった。およそ 1925 年から 1960 年にかけて主流をなしてきた「構造言語学」とそれに基づく外国語教育「オーラル・アプローチ」が理論的に破綻をきたしたのではないかと、英語教育が再検討を迫られた頃で、認知的アプローチや人間学的アプローチへの関心の高まりが感じられました。国際的な場でとうとうと流れる言語理論の波動と発展を実感することが出来たのは、実に得がたい経験でした。この転換期に新しい言語理論の英語教育へのかかわりを見いだそうとする試みは授業にも反映されていて、後にテイスティングの研究で有名になられた Spolsky 講師(当時)の英語教育は印象に残っています。

また、当大学の音楽学部は有名で、フルブライト留学生として日本から留学されていたチェリストの堤剛氏のコンサートとか、ワグナーのオペラ「ニーベルングの指輪」の上演もあり、余暇を楽しんだ覚えがあります。退職して暇が出来た今、健康が許せば思い出の地ブルーミントンを再訪したいと思っています。

## 便り・たより・便り

○寺西勇二

元気でまだ教師を続けています。

○土岡弘通

定年後、介護老人保健施設みどり第二の人生を働き始めて間もなく 8 年になります。老医が高齢者をお世話するのですが、体力が徐々に低下するのを身を感じております。

○小田海平

年老いた 'NEET' の 1 人として悠々自適の日常を送っております。

○水谷昭

Yale 大学留学以来 40 年が過ぎました。当時夢見た 21 世紀の世界とは、現実とは随分違った姿になってしまいました。

○稲木せつ子

元気です。現在はオーストリア、ウィーン在住です。

○杉浦久也

お陰で元気に過ごしております。先日オーストリー・スロベニアへトレッキングに井って参りました。

○木村克美

文科省五ヵ年研究プロジェクトに参加していましたが、昨 3 月に終了し、名古屋サイエンスパークに設置していた研究施設も解散しました。この間、志段味に通勤していましたが、今は分子研で、一寸仕事をしているところです。

○奥村保明

非常勤の講義もなくなり、産官学連携推進の活動をしています。

○田中春美

昨 3 月名古屋外国語大学を定年退職し、現在年金生活の身です。

## 2004年度

### 会員移動(2004.4~2005.3)

#### 入会

永井真理 (名古屋大学、2003、Johns Hopkins University)

#### International Health

#### 退会

勝守 寛 (中部大学、逝去)

興津達朗

畑 光夫

結城正美 (豊橋技術科学大学から金沢大学へ転出)

#### 変更

奥野信宏 (名古屋大学から中京大学へ所属変更)

加藤俊一 (南山大学を退職)

田中春美 (名古屋外国語大学を退職)

馬場昌子 (愛知医科大学を退職、同大学名誉教授)

## 会議報告

### 役員会

#### 第1回役員会

日時：4月23日18:30~19:30 椋山女学園大学生生活社会科学棟会議室

出席：今辻、上田、木下(宗)、木下(徹)、篠田、千田、藤本、和爾

議題：1 総会の日程とゲスト・スピーカーについて

6月11日、南山大学を予定。ゲスト・スピーカーとして川島正樹氏(南山大学)に依頼する

2 17年度以降の事務局体制について

役員交代を含め、藤本氏のところで早めに検討する

3 その他

高齢、定年退職による退会者が増えているので、会費納入等のあり方を検討する

#### 第2回役員会

日時：9月27日18:00~19:30 椋山女学園大学生生活社会科学棟会議室

出席：上田、木下(宗)、木下(徹)、篠田、千田、山田、和爾

議題：1 例会について

11月下旬の土曜日、地震防災をテーマに、名大理学研究科に講師を依頼する

2 17~18年度の事務局体制と役員人事について

会長の交代、事務局の移転について、藤本氏の意見を聞くことになる

#### 第3回役員会

日時：3月4日 椋山女学園大学生生活社会科学棟会議室

出席：

議題：1 役員改選と事務局の移転について

2 総会について

## 総会

平成16年度の中部同窓会の総会は6月11日(金)午後6時より、南山大学L棟会議室で会員15名の出席を得て、予定通り開催された。総会議事終了後、南山大学アメリカ研究センターとの共催で、川島正樹氏(南山大学アメリカ研究センター長)によるスピーチと討論に約1時間を費やし、最後を恒例の懇親パーティで締めくくり、8時30分散会となった。総会での議事の内容は以下のとおりである。

### 1 平成15年度事業報告

- 1) 総会の開催 15年6月6日、名古屋大学大学院国際開発研究科棟を会場にして開催、総会議事終了後、ゲストの奥野信宏氏(名古屋大学副総長)による「名古屋大学法人化に向けて」をテーマとする講演を聴く。講演終了後、ゲストを囲み、会員懇親会を開いた。
- 2) 例会の開催 15年11月29日、椋山女学園大学生活社会科学科棟で開催。ゲスト・スピーカーとしてお招きした柯 隆氏(富士通総研朱に研究員)による講演「中国経済の高成長と人民元問題」を聞き、最近の現地調査を踏まえた中国経済の高成長の要因と人民元切上げ問題の背景等について、理解を深めることができた。学内『大正軒』での恒例の懇親パーティでゲストを囲み、会員相互の懇親を深めた。
- 3) 役員会の開催 総会、例会の準備のため椋山女学園大学で3回開催した。
- 4) 出版 ニュースレター、*The Fulbrighter in Chubu* 14号と会員名簿(2004年版)を刊行、会員および日米教育委員会、他地区同窓会に郵送した。
- 5) フルブライト記念基金(FMF)によるアメリカ教員招聘プログラムへの協力。

### 2 平成16年度の事業計画

- 1) 総会の開催
- 2) 例会の開催 11月頃を予定。ゲストとテーマについて希望を出していただくことを願います。
- 3) 役員会の開催 年度内に3回を予定。

### 4) FMF プログラムへの協力

- 5) ニュースレター15号を編集し、年度内に配布を予定している。

### 3 平成15年度収支決算報告ならびに会計監査

別紙資料に基づいて事務局より説明があり、続いて上田慶一監事から適正であるとの監査報告(書面)があり、これを承認した。

### 4 平成16年度の収支予算案

配布資料に基づき、事務局より説明があり、これを承認した。

### 5 役員の分担変更

当日の出席者は以下のとおりである。(南山大学アメリカ研究センター関係者は除く)

### ゲスト

川島正樹 南山大学外国語学部 教授(1995-96、中部同窓会会員)

### 会員

藤原由紀子(1986、名古屋アメリカンセンター)、古橋宏造(1981-83、中部電力)、藤本博(1977-80、南山大学)、堀 菊子(1950-51、医師)、市川芳彦(1955)、川島正樹(1995-96、南山大学)、木下宗七(1973-74、椋山女学園大学)、木下徹(1989-91、名古屋大学国際開発研究科)、千田純一(1974-75、中京大学)、篠田靖子(1964-67、金城学院大学)、塚田守(1981-82、椋山女学園大学)、梅沢時子(1968-70、東海学園大学)、和爾赳城(1961-62、)、渡辺純(1981-83、中部大学)

## 例会

本年度の例会を、11月27日(土)の午後、名古屋大学大学院国際開発研究科棟で開催した。

メインの行事は、ゲスト・スピーチとその後の懇親パーティである。今回のゲストとしては、名古屋大学地震火山・防災センター教授の山田功夫教授を迎えし、「東海地震を考える」というテーマで、地震発生メカニズム、前兆と予知の可能性等について、発生したばかりの新潟中越地震を含め、いくつかの具体例を取り上げて説明していただき、大変興味深く拝聴した。

講演の締めくくりとして、地震への備え(耐震性)の重要性を特に強調

された。スピーチの後は、会場を国際開発研究科棟の一階に会場を移し、ビールを飲みながら歓談した。

当日の参加者は以下のとおりである。

**ゲスト**

山田功夫（名古屋大学環境学研究科付属地震火災。防災研究センター教授）

**会員**

赤沢堯（1955-57）、藤本博（1977-80、南山大学）、藤本文弘（1964、愛知県立大学大学院）、橋本穆（1959-60、安達顧問）、堀菊子（1950-51、医師）、飯田忠三（1962-64）、市川芳彦（1954）、伊原正（1985-90、鈴鹿医療科学技術大学）、川島正樹（1995-96、南山大学）、木下宗七（1973-74、椋山女学園大学）、木下徹（1989-91、名古屋大学国際開発研究科）、木村尚（1955）、篠田靖子（1964-66）、角岡秀彦（1958-61、サンバレーかがみ野施設長）、上田慶一（1963-64）、和爾赴城（1961-62）、山田豊太郎（1952-53）。注：カッコ内は渡米年次。

**非会員**

和爾玲子

平成15年収支決算（平成15年4月～16年3月）

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	508,966		会議費	19,950	役員会費用
利子収入	28		総会費用	19,500	郵便代
				56,165	パーティ代
年会費	252,000	84名分		5,000	アルバイト代
				20,130	講演謝礼
総会会費	57,000	19名分	例会費用	19,500	郵便代
				59,250	パーティ代
例会会費	52,000	17名分		6,000	アルバイト代
				40,000	講演謝礼
			出版費用	84,000	会報14号
				21,315	名簿
				10,000	テープ起こし代
				30,390	郵便代
			通信費	3,220	
			旅費	21,000	東京1回
			その他	5,311	
			次期繰越	449,263	
	869,994			869,994	

注：(1)総会、例会のアルバイト代は、準備と当日のためのアルバイトを含む  
 (2)名簿は隔年に発行する。  
 (3)テープ起こし代は講演録音テープの採録（2回分）・ワープロ作業代

平成15年度の収支決算の内容につき、領収書、預金通帳等関係種類によって監査を行なった結果、適正であることを認め、ここに報告いたします。

平成16年5月31日

監事 上田慶一

平成16年収支予算 (平成16年4月～17年3月)

収入の部			支出の部		
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要
前期繰越	449,263		会議費	18,000	役員会費用
利子収入	21		総会費用	20,000	郵便代
年会費	252,000	84名分		48,000	パーティ代
				10,000	アルバイト代
				20,000	講演謝礼
総会会費	54,000	18名分	例会費用	20,000	郵便代
				48,000	パーティ代
				10,000	アルバイト代
				20,000	講演謝礼
例会会費	54,000	18名分	出版費用	80,000	会報15号
				10,000	アルバイト代
				30,000	郵便代
			通信費	6,000	
			旅費	21,000	東京1回
			その他	5,000	消耗品
			次期繰越	483,284	
	809,284			809,284	

注：(1)総会、例会のアルバイト代は、準備と当日のためのアルバイトを含む。

(2)名簿は隔年に発行する。

年会費納入状況について

ご存知のように、中部同窓会の活動は会員の年会費で支えられております。現在の3000円という年会費は、1982年に中部同窓会が結成された時に決められた金額で、各地区同窓会とも同額となっており、一度も引き上げは行われていません。

中部地区（東海3県と静岡県）在住のフルブタイターは約250名とうかがっておりますが、中部同窓会に加入しているフルブライターは現在約130名です。従いまして、130×3000の39万円が会の基本収入になるはずですが、ところが、実際には、残念ながら、失念その他の理由で会費を納入されている会員は80～90人くらいです。

最近の5年間（平成12～16年度）についてみますと、平成12年度＝86名、13年度＝84名、14年度＝85名、15年度＝91名、16年度82名となっております。16年度はこの5年間で最も少なく、しかも、例年と異なり、総会案内時だけでなく、例会後に未納の会員に再度お願いした結果です。例年ベースでは73名となっております。

会の運営はこれまでの貯蓄（繰越金）がありますので、いまずぐに同窓会活動のお金が足りなくなる（赤字になる）ということはありませんが、今後とも会員のご協力をお願いする次第です。

なお、日本全体の高齢化以上に、中部同窓会員の高齢化が進んでおり、高齢・退職を理由に退会したいというお申し出もあります。現在、役員会では、高齢者にもご心配をかけないような会費制度（免除等）のあり方を検討中であり、新年度の総会に提案する予定でおります。この件について、みなさまの忌憚のないご意見がいただければ幸いです。



G	中部同窓会
F	事務局より

中部同窓会会報 Fulbrighter in Chubu No.15 が出来上がりましたので、お届けします。

総会、例会でのスピーチについては、その内容をできるだけ生の形で掲載できるようにということで、講師の先生にはいろいろご協力をいただきました。また、随想については、4人の方にフルブライターとしての体験とそれぞれの想いを語っていただきました。ありがとうございました。随想の編集では、幹事の篠田靖子会員にお世話いただきました。

中部同窓会では、先日の役員会で、17年度から会長の交代と事務局の移転を行うことを決めました。正式には次の総会で審議いただくこととなりますが、承認が得られますと、事務局の移転に伴って会員にご不便をおかけすることになるかと思いますが、その際はお許しいただきたいと思ひます。(木下宗七)

---

発行年月日 平成 17 年 3 月 31 日

発 行 カリオア・フルブライト中部同窓会  
会長 木下宗七

事 務 局 椋山女学園大学生生活科学部兼現代マネジメント学部  
木下研究室気付  
名古屋市千種区星ヶ丘元町 1 7 - 3 (〒468-8662)  
電話 052-781-1186 (代) 内線 6 4 7  
電子メール [kinosita@ss.sugiyama-u.ac.jp](mailto:kinosita@ss.sugiyama-u.ac.jp)